

目 次

巻頭言

- はじめに 二神 俊一 1

特 集

- 二神種章の思い 編 集 部 2

シリーズ

- 系譜・家紋紹介 (NO. 16) 調 査 部 11

会員さんからの投稿

- 我が二神家の歴史 二神 和子 30
飯室河野氏と二神氏の関係 河野 修興 32
二神寛治が筆記した「海水浴法概説」の紹介 齊藤 文嗣 37
新古今和歌集 溝田 孝一 47
野次馬会員の随想 松下 邦栄 51

役員のつぶやき

- 近くで遠い故郷 二神喜久雄 53
宏介さんのなにわことばで思うこと 二神 宏介 54
有名になってきた由利島 二神 康郎 58
富さんの桜 二神 亮郎 60
人はなぜ移動するのか 二神 久藏 63
39 会 二神 俊一 67

- 会 則 70

- 役員名簿 72

- 編集後記 73

はじめに



会長 二神 俊一

瀬戸内海が国立公園指定第一号として昭和9年（1934）3月16日に指定を受けて、今年で80周年を迎えました。その記念行事として、愛媛県と広島県が共催で、瀬戸内海の自然や歴史・食レジャーなどをテーマに、瀬戸内海沿岸市町を舞台にして行われる一大観光イベント「瀬戸内しまのわ2014」が、いま正に開催されています。

一方、能島村上水軍を題材にした和田竜氏の歴史小説『村上海賊の娘』が、2014年本屋大賞に選ばれたこともあり、地元今治市（宮窪町）の村上水軍博物館は、来館者が一挙に増えて、大変な混雑ぶりであると報じられています。

また、松山市の隣町の伊予郡砥部町出身の大森謙一監督の映画『瀬戸内海賊物語』（配給：松竹）が全国で公開（2014年5月末）となりました。

併せて、藤田達生氏の著書『秀吉と海賊大名～海から見た戦国終焉～』中公新書2146が刊行されるなど、近年、瀬戸内海の海賊にスポットをあてた話題が豊富に出回っています。

これらのこととは、二神系譜研究会の研究活動にも前向きの風が吹いていると感じられます。

今年は二神系譜研究会が創立して15年目になります。これまで地道な調査・研究を続けてまいりましたが、今後は、さらに、二神系譜一族だけではなく、他の系譜及び地域の歴史研究解明にも貢献できるような活動を目指してまいりたいと考えています。

二神種章の思い

編 集 部

二人の種章

約 800 年もの間、二神島で二神氏が続いてきたのは並大抵のことではなく、それには多くの人たちの手を経て繋がってきてている。その中の一人が、江戸時代中後期の二神種章である。「中興の祖」と評してもいい人物ではないかと思う。二神家に伝わる古文書の整理や文献を書写収集し、何種類もの系図や由緒書きに纏めている。彼がいたからこそ、今に文書類が残っていると言える。

二神島本家第 39 代の二神司郎氏が生前に「実は、私には種章という名前があり、二神司郎藤原種章と言います。どうも、兄や弟にはなくて、私だけに父が付けてくれたようです。」と、おっしゃっていた。この内容のことは、二神康郎理事が「朝日旅の百科 濱戸内海」（昭和 59 年 7 月 10 日号、P. 83-86、朝日新聞社刊）で書かれたりにも登場している。「種章」という名前や功績を承知していく司郎氏に付けたのだろうか、それとも偶然なのかはわからない。（※二神司郎は本名、「司朗」は、芸術家としての名前）

二神種章については、「海の民ふたがみ 創刊号」（平成 12 年 9 月号）で、二神栗舎とともに「人物伝」で紹介をしているし、平成 11 年 5 月 30 日に二神島で開催された「第 1 回二神島交流会」の記念講演で、関口博臣氏（神奈川大学日本常民文化研究所特別研究員）が紹介をしている。二神種章に関することが、過去の掲載文等と重複する部分もあるかと思うが、その後の発見等を交えながら紹介してみたい。

二神種章が残したもの

二神種章は、二神島本家の過去帳によると「仙嶽院徳香梅司居士 寛政六年甲寅年八月朔日壽六十一歲 二神種信嫡同苗藤右衛門尉 種章ノ元祖道隆ヨリ三十二代之孫二神嶋居住之祖藤十郎種家ヨリ

十五代之孫也廟所西畠下ヨリ五段ニ葬但八月朔日丑ノ中刻ニ病死ス種福父也但法華妙典一部一字一石書写シ廟所江納」とある。

享年 61 歳とあるので享保 19 年（1734）頃に、二神種信の長男として生まれ、若いころから庄屋職の見習いをし 20 歳代後半からは、事実上家や村の中心として働いている。種章が生きた時代は、徳川 9 代将軍家重・10 代将軍家治、老中は田沼意次の頃である。

種章は「豊田二神嫡流系図」を作成した人物であり、多くの系図を集めたり書写したり作成した、その動機は何だったのだろうか。系図等がたくさん作られたのは安永期（1772～1781）で、30 代後半から 40 代前半という働き盛りにあたり、家や村の運営を中心になってやっている時期が系図作りの時期と一致している。そこには、由利島に関わる領有権の問題があったと思われる。

「明和 5 年（1768）、松山藩が由利島を交易の為に召し上げる」と言いだし、種章は松山に出向いて「由利島がいかに二神島にとって大切な島であるということをいろいろ書きつづった願書を出して必死に抵抗した。種章は命がけでその主張を通し、由利島の支配権を維持した。その後、将来のことを考え由利島に関する資料をたくさん集め、一族の歴史を解き明かそうという動機づけになったのではないかと思われる。

二神種章が書写等した文書の主なものは、次のとおり。

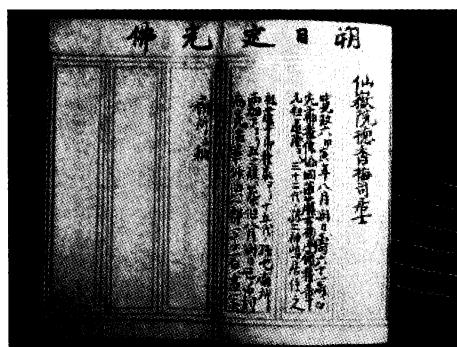
（神奈川大学日本常民文化研究所「二神司朗家文書目録」から抜粋）

明和 9 年（1772） 二神氏田畠地寄帳

安永 3 年（1774） 祭礼入用帳

安永 5 年（1776） 系図并古来書附写 四冊入

安永 5 年（1776） 藤原氏嫡流并豊田二神之子孫系図写



安永 5 年 (1776)	藤原氏豊田二神先祖并中興之靈会日年忌祿
安永 7 年 (1778)	百合嶋祿
安永 8 年 (1779)	豊州森久留島信州之家中穂山多仲由緒書付
安永 8 年 (1779)	久留島家中秋山家由緒問合せ願いの旨書状
安永 9 年 (1780)	予陽河野盛衰記ノ内 / 三島大明神 / 河野代々 / 実名 / 抜書
安永 10 年 (1781)	柳原氏系図
安永 10 年 (1781)	二神氏末家之次第
寛政 5 年 (1793)	風早嶋二神村之内油利嶋絵図

二神種章と豊後森からの訪問者

安永 6 年 (1777) 4 月、九州豊後森久留島藩の家臣になっていた得能新三郎と二神国次の親子が、二神島の種章を訪ねて会っている。それは、慶長 6 年 (1601) 9 月、鹿島城主だった来島康親が関ヶ原の合戦で西軍に加担した廉により、豊後森へ転封となるが、これに同行した片山二神氏の分流に繋がる子孫だという。二神通範の末孫で同じ先祖であることを確認している。それ以降も、豊後森二神氏と二神島本島二神氏との交流は続けられたようである。文政 5 年 (1822) にも豊後森の二神瀬兵衛種村が二神島を訪ねている。(詳しくは、「海の民ふたがみ、創刊号 P. 53 – 54 及び第 4 号 P. 29 – 32」を参照されたい。)

二神島宇佐八幡神社の御神燈

二神島の宇佐八幡神社の鳥居をくぐると両傍らに一対の御神燈がある。凝灰岩で讃岐の三豊天露石か豊島石（松田朝由氏のご教示）と思われるが、風化が激しくて一部しか読めない。前面には「願主 二神□□・・」、裏面には「安永二年己九月」と判読できた。安永二年 (1773) だとすると種章の時であり、「二神□□」の下部には種章、新四郎などと書かれていたのではないか。現状では、これ以上の判読が難しい。この周囲にある鳥居や本殿に上る 170 ある石段



は明治 12 年 (1879) に作られている。この御神燈が以前からこの場所にあったものか、どこからか運ばれてきたのかは分からない。それと、神社の石段を登りきったところにも御神燈がある。これには、「寛政四年 (1792) 九月 献主當村 魚屋七兵衛」とある。魚屋七兵衛は、二神島で魚介類などを大坂方面に運んでいたと言われる人物で、種章とも親交があったと思われる。七兵衛は「享和三年五月九日享年六九歳」で亡くなっている。法名は松齡徳成居士。平成 25 年 9 月 17 日神奈川大学日本常民文化研究所の二神島調査で萬井特別研究員のチームにより確認された。前前から魚屋七兵衛の墓石については、気になっていたので発見されてよかったですし、七兵衛のと一緒に妻子の墓石も確認されている。

魚屋七兵衛については、「海の民ふたがみ第 2 号 P. 15-16」でふれたが、その中で『安芸忠海江戸屋御客帳（羽白家文書）』に「文化十五年十二月二十一日松山ふたかみ魚屋七兵衛濡米直入被成候」とあり、実在した人物である。ただ、年代的に前述の墓石の七兵衛ではなく、その跡を継いだ七兵衛であろう。



二神種章と津和地の「お茶屋」

魚屋七兵衛奉獻の御神燈

寛永 13 年 (1636) 松山藩は、津和地瀬戸（津和地島と怒和島の間の瀬戸）を通航する幕府公儀役人や参勤交代で上下向する西国諸大名の接待にあたらせるため、津和地島にお茶屋を設け、藩士八原佐野右衛門を常駐させた。八原家は幕末まで常駐しその任にあたった。そこで書かれた御用日記が残されている。中島町教育委員会は、

それを八原家御用日記として第一巻・明和5年(1768)～天明7年(1787)を昭和61年に、第二巻・天明八年(1788)～寛政十二年(1800)昭和62年と相次いで出版した。

種章も、八原佐野右衛門の指示のもと周辺の島々と協力して勤めを果たしている。その日記から、種章の時代に関わるものを紹介する。(参照:『八原家御用日記とその周辺』平成26年5月、著者:橋本矩之)

寛延元年(1748)

朝鮮通信使御馳走御用で二神村から水舟2艘、新糠1俵、

葉豆2俵

宝暦13年(1763)

薩摩藩主下向で二神村より怒和島東端に番船1艘出す。

明和6年(1769)9月25～27日

薩摩の殿様の船が二神村に碇泊。27日朝出帆。

天明8年(1788)

お茶屋の裏山に落雷。6月21日～22日佐野衛門と二神村預り
庄屋藤右衛門が立ち会う。

天明9年(1789)2月6日

二神村から人足60人が来て、お長屋を立て始めた。

寛政3年(1791)5月28～29日

公儀役人下向で二神村から船を3艘出す。

長崎御奉行通行コース



上図のようを想像された地図ではややち
この同じ面影の想像圖にすぎない。

お茶屋の想像図

(津和地島集会所にある)

二神種章と河東碧梧桐のつながり

明治時代の俳人正岡子規の門弟に高浜虚子と河東碧梧桐がいる。碧梧桐は、新傾向俳句を唱え、後に種田山頭火にも影響を与えたとされるが、そのルーツは二神島にあったと思われる。

というのは、種章の四男で松山の河東家へ養子入りした人物に「末彌」がいる。二神家の系図や過去帳によると末彌は、種村・八郎・

平太・権之丞の名があり、天保十一年正月十三日に亡くなっている。

系図には「松山藩中河東権之丞養子六十四歳ニテ没法名春惠院閑斎日遊居士廟所山越村法華寺」とある。この系図は種章が書いたもので、子孫が書き足している。そこに「右以上ハ種章翁之筆也以下ハ坤補之 明治二十一年五月十九日 種村孫 河東坤謹書」とある。河東坤（名を静溪、字は子厚）は、松山藩校明教館教授で千船学舎開設した人物で、末彌の孫にあたり碧梧桐の父である。坤は系図の最後の方に自ら書き足していて「種村（末彌）の孫」と表記している。

末彌は、法華寺（松山市御幸1丁目）に墓石があるとされるが、確認はできていない。末彌の子虎臣から静溪、碧梧桐の墓石は、宝塔寺（松山市朝日ヶ丘）にある。

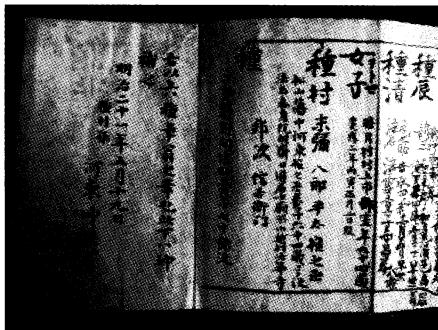
・・二神種信—種章—末彌—河東虎臣—静溪—碧梧桐・・

◇河東虎臣（かわひがし こしん）文化2年～嘉永4年・1805-1851・9・19

伊予松山藩士。河東碧梧桐の祖父。江戸に出て古賀精里に学び、ついで昌平黌に入る。帰藩して藩校「明教館」の教授となった。名は矯、通称は平蔵。

◇河東静溪（かわひがし せいけい）天保元年～明治27年・1830.9.1-1894.4.24

父は松山藩士。「明教館」の教授河東虎臣。初めは父に学び、ついで昌平黌に入つて古賀同庵に学ぶ。帰藩後、明教館助教から教授



二神家過去帳

にすすむ。漢学塾千舟学舎を開設して、一般庶民教育に貢献した。

ただ、末彌はどういう経緯で二神島の二神家から松山の河東家に養子で入ったのかは定かではない。種章が資料収集をしていく中で知り合った人たちとの縁、つながりでの結果であったのかもしれない。



河東家の墓石（松山市・宝塔寺）

中央が碧梧桐、その左が静渓の墓石。
手前の四列目一番右が虎臣の墓石。

種章の墓石

種章は、享保 19 年（1734）頃に生まれ、元文・寛保・延享・宝暦・明和・安永・天明・寛政の時代を生きた。二神島はもちろんのこと由利島を守り、数多くの書類などを新たにし、後世に伝えるべくあちこちから資料等を集めている。島を預かる庄屋職の使命以上のことを精力的に行っている。多くの人脈をも持っていたのかも知れない。現在の情報収集作業にも劣らぬばかりの実績を残しているようだ。その彼も、寛政 6 年（1794）8 月 29 日に享年 61 歳で亡くなっている。墓石は、二神島の二神家墓地の五段目にある。墓石の左側には、「残暑や 夜道に越えん 死出の山」という辞世が刻まれている。



二神種章の墓石

二神種章と関口博巨氏の講演

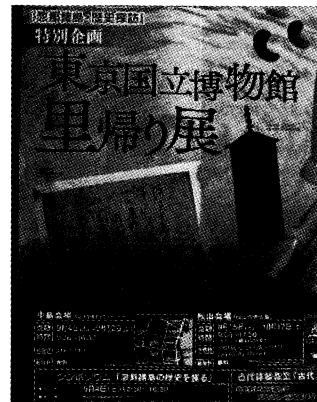
最後に、平成 22 年 9 月 4 日に行われた「忽那諸島の歴史を探る」シンポジウムでの関口博巨氏の講演から、種章に関連する部分を引用させていただく。

・・・これより前、省略・・・

近世の各時期の二神家当主とその子息は、二神村の庄屋に就任しただけでなく、時に応じて島方の改庄屋や大庄屋をも勤めて、苗字御免の特権を許された。例えば二神種信（明和二年＝1765 年没）は、二神村庄屋のほかに島方の改庄屋、大庄屋格を歴任して二神姓の公称を許され、御巡見様御通船御用の大任も果たした。その嫡子の種章（寛政六年＝1794 年没）は、父の存命中から朝鮮人来朝御用やお茶のある津和地の庄屋並として活躍し、居村庄屋役を継承後は津和地村の改庄屋、御用船通船御用掛、あるいは郡役人代まで勤めた。中世という時代の荒波を乗り越えた二神家は、近世という時代に適応し、間違いなく新たな存在感を示していた。・・・途中略・・・

近世行政村の庄屋となった二神家は、藩権力に対抗することで、由利島あるいは海域への「支配」意識を焼きなおしていた。二神新四郎種章が、安永四年（1774）付けの由利明神（矢立大明神）棟札に「二神村莊官」と肩書していることは、それを象徴的に示している。「二神村」という近世の行政村名の下に、中世の莊園を預かる役職である「莊官」という言葉を連ねているところに、再解釈された「海の領主」の矜持が垣間見えるのである。

松山藩との命をかけた駆け引きのなかで、二神島と由利島の歴史に向き合った種章は、安永年間以降、二神家・二神一族の由緒に関心を深めていった。大友義統書状、河野通直仮名書出、豊臣秀頼書状などの古文書類のほか、「予陽河野盛衰記」「予陽河野家譜入」「忽



那嶋開発記」といった記録類にいたるまで、彼が歴史学習のために書写収集した文献はまことに多い。

さらに種章は、豊後森藩の二神家や饒村の豊田家をはじめ、各地に散在していた二神氏諸流の諸家とも交流を持つようになった。種章によるこうした研究や交流の成果は、「豊田二神藤原氏孫系図」「藤原氏嫡流并豊田二神之子孫系図写」「二神新四郎由緒親類附」など、何種類もの系図や由緒書にまとめられている。

中世の「衆」は解体したが、近世中後期には「家」あるいは一族の新たな結合の形が育まれていた。その一族のネットワークは、武士身分も庄屋・百姓身分も超えていこうとするもので、近代以降の「家」や親類中の間人関係へと繋がっている。

以上、二神種章に関するなどを紹介してきたが、内容的に十分ではない部分も多い。確実にではなく、推定される場合もあるが、今後さらに研究調査を進めていく中で明らかにしていきたい。

二神種章関連略年表（※編集部作成）

和暦	西暦	推定年齢	できごと
享保 19 年頃	1734	0	二神種信の長男として生まれる
延享 2 年	1745	11	※ 9 代將軍徳川家重就任
宝暦 10 年	1760	26	※ 10 代將軍徳川家治就任
明和 2 年	1765	31	2 月 29 日、父種信享年 69 歳
明和 5 年	1768	34	由利島召し上げ事件
安永 2 年	1773	39	9 月、宇佐八幡神社御神燈奉獻（？）
安永 4 年	1775	41	由利島の「矢立大明神社」再建。「莊官」の銘。
安永 5 年	1776	42	「藤原氏嫡流并豊田二神之子孫系図写」など書写
安永 6 年	1777	43	豊後森久留島藩得能新三郎・二神国次親子が来島し面会
安永 7 年	1778	44	「百合嶋祿」を書写
安永 9 年	1780	46	※中島の粟井、小浜、大浦（一部）が天領に。
安永 10 年	1781	47	「二神氏末家之次第」を書写
天明 2 ～ 7 年	1782 -1787	48 ~ 53	※天明の飢饉。不作、洪水、浅間山噴火、気候不順
寛政元年	1789	55	※忽那島（中島）小浜村民の騒動。
寛政 5 年	1793	59	「油利嶋絵図」を作成
寛政 6 年	1794	60	8 月 29 日享年 61 歳

系譜・家紋紹介 (NO.16)

調査部

太山寺二神氏

1. はじめに

太山寺と聞けば四国八十八ヶ所霊場第 52 番札所の太山寺を思い浮かべる方も多いと思います。

今年は弘法大師（空海）が四国の地を修行され開かれた四国霊場開創 1200 年の記念すべき年に当たり、早春から巡礼者が多く四国の各地を訪れ、霊場に参拝されています。

太山寺は真言宗智山派に属し昔から巡礼者が絶えず、寺の創建は天平年間（739 年頃）と伝えられ、聖武天皇の勅願によって行基が十一面觀音を刻み、これを本尊としたのに始まると云われます。現在の本堂は国宝に指定されており嘉元 3 年（1305）に建立されたとの記録が残されています。また、太山寺は「一夜建立」の伝説でも知られています。

このように太山寺は奈良時代から始まった寺院と伝えられ、時代を重ねて行く内に次第にその門前町として遍路宿や茶店などが開設され、今日の様な町並みを形成したものと考えられます。

国宝太山寺本堂の裏山から村の背後に聳える経ヶ森に登ると、東方面に高縄山系の連山を望み、南東方面には松山城とその背後に皿ヶ峰連峰が東西に連なり、西方からぐるりと北方面には由利島や二神島を始め忽那諸島など、瀬戸内海の島々やご先祖が居た風早地区の中世山城の峰々が眺望できます。平成の大合併で松山市も旧温泉郡に所属してきた二神島をはじめとする島嶼部や、旧北条市部が編入されたため、非常に広域な地域が松山市内となり、目（文字）や耳（放送）から入る町のイメージが現実と大きく異なっているこ

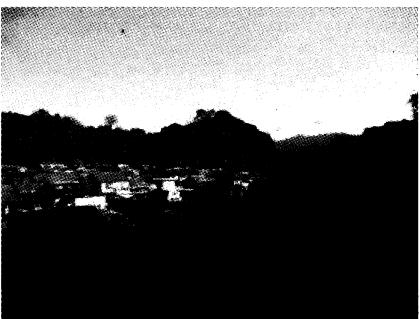
とに気が付かれると思います。このため松山市太山寺町と云えば何か旧松山市内に靈場太山寺と太山寺町の門前があるように感じられる方も多いのではないでしょうか。

太山寺村を理解するために少しだけ村行政の変遷について述べておきます。太山寺村が松山市に編入合併されたのは昭和 15 年 8 月からで、明治 23 年から松山市編入合併まで太山寺村は隣村の馬木村、和気浜村と三ヶ村併せて和気村と呼ばれていました。太山寺村と単独で呼ばれた時代の最後は明治 22 年で、それまでは明治初年の大、小区時代を除き伊豫国（豫州）和気郡太山寺村と呼ばっていました。それ以前の村名の始まりは天正 18 年（1590）と云われ「…太山寺は久枝郷に属せし事ありしが、天正十八年諸郡郷邑内の小字名を悉く村名に改めたるとき地内に有名なる巨刹太山寺あるを以て名付け…」（『新編温泉郡誌』大正五年三月十五日発行 松田卯太郎著）と記載されている文献もあります。

第 16 回目となる「系譜・家紋紹介」は、その靈場である門前町の旧太山寺村（現在の松山市太山寺町、船ヶ谷町）に居住する二神氏系譜を紹介します。



四国八十八ヶ所靈場第 52 番札所太山寺



太山寺本村地区

2. 太山寺二神氏の由来と系譜の流れ

「太山寺二神氏」とは現在の松山市太山寺町の本村地区と片廻地区に、江戸中期頃からそれぞれ居住してきた「本村二神系譜」と「片廻二神系譜」、そして会報第10号で紹介した「船ヶ谷二神氏」(ふながたに) 系譜の三系譜総称の呼称です。これは行政区域上における分類、整理をしたもので「幕末、明治初年時点におけるご先祖の居住地名をもって系譜名称とする」(会報創刊号「系譜 家紋紹介」)とした基準方針に変更はありません。



太山寺二神氏の由来について明確に古文書や伝書、系図略記、刊行物等で紹介されたものはこれまでのところ確認されていません。ただ、戦国期のある時代に登場する太山寺二神系譜に関する事柄でないかと考えられる古文や、幕末から明治期に当時の社会における「勤勉実直」を賞賛された二神系譜の個人に関する雑誌報道などについては残されたものがあります。

今回紹介する「太山寺二神氏」には既報の「船ヶ谷二神氏」が含まれ、以前紹介した調査内容に新発見の確認部分等を報告しています。それは「船ヶ谷二神系譜」に関するのではないかと考えられる古文書に記された「友近名」の場所が当時「久枝郷」にあり、かつてこの地域が海岸線近くにあった可能性が指摘されて居る事です。万葉集の「にぎたづ」なる港を巡る「和氣説」に「久枝郷」「太山寺村」「船ヶ谷村」の地域も関わっている事が云われ、昔から重要な場所であったと考えられています。

【太山寺二神氏各系譜の状況】

系譜	現地居住家	系譜伝承・古文書	過去帳・系図	墓地・墓碑年代	家紋、供養、記事等
本村系譜	二神勘一家 (宗家) (10年前当主死去)	古い話は何も聞いて居ないので不明 (長女二神ツヤ子さん)	不明	本村墓地・文政天保、文久、慶應、明治年間	抱き茗荷「釈・二神家先祖代々供養塔」 他真宗系墓石10基余
	二神 孝家 (勘一家の分家)	勘一家からの分家で宗家の事も詳しく知らない(当主)	不明	本村墓地・大正昭和年間	抱き茗荷「二神家奥津城」 個人1墓
片廻系譜	二神伴之丞家 (宗家)	【本文紹介】	【本文紹介】	片廻村墓地・享保、天明、文政、天保、弘化、文久、明治	丸に片喰「二神家之墓」 *篤農家、二神政七夫妻輩出系譜 *別家で明治、大正期の教育者・郷土史家、柳原繁太郎系譜引継
	二神史郎家 (10年前当主死去)	【本文紹介】	【本文紹介】	片廻村墓地・	丸に片喰「二神家之墓」 *旧和氣村村長、二神筆吉輩出系譜 *元二神会会員
	二神泰明家 (平26.4.17逝去)	二神家の事は何も聞いてないの で判らない (泰明夫人)	不明	本村墓地・天保嘉永、大正	丸に違い鷹の羽 「二神家之墓」
船ヶ谷系譜	二神正男家 (宗家源右衛門系)	【本文紹介】	【本文紹介】	船ヶ谷二神家墓地	抱き茗荷『海の民 ふたがみ』 第10号で紹介
	二神明朗家 (正男家分家)	『海の民 ふたがみ』 第10号で紹介	『海の民 ふたがみ』 第10号で紹介	船ヶ谷二神家墓地	抱き茗荷『海の民 ふたがみ』 第10号で紹介

3. 片廻二神系譜

【寺社調査】

菩提寺・太山寺

(四国靈場 52番札所)

所在地 松山市太山寺町

氏 神・勝岡八幡神社

(松山市無形文化財の一体)

走りで知られる神社)

所在地 松山市勝岡町



太山寺村片廻地区全景

▽宗家二神喜代子家聞き取りと資料調査

系譜伝承・古文書・過去帳・系図・家紋などについて

片廻二神系譜に伝わる系譜伝承の中で最も知られている話は5代

前のご先祖、篤農教育家の二神政七、種子（たね）夫婦の事で、当時の教育雑誌にも掲載され一時世間に知れ渡っていました。

この『愛媛教育雑誌』（明治 30 年 12 月 20 日発行）の「郷土史談」

郷 土 史 論

●二神政七夫妻の事 桥原繁太郎

伊賀國和氣郡太山寺村（今ハ風景節和氣村ノ一部也）に二神政七と云へる者あり（後子ニ同姓同名ノモアリ）資性朴直勤勉にして其父を七之

舊門主曰く家業を以て業とせり改七幼名して能く其兩親に事へ是するに及んで深く心と姦淫に用ひ自ら營業培養の方法を考究し其得たる所も少なからずと見て一日田畠にあらず夕陽の西降に入らんとするを見て以爲日は暮に没するも朝に東天に活輝を放つ父母の年齢の傾むけるは亦

奈何ともする事なしと大に快暢の心を起し乃ち春は桃櫻の樹下に双親を誇ひ妻と俱に酒盃を侑め次は明月の庭にて菓餅を供して笑し夏は涼しく冬は暖かに暮ら家庭に心を尽し只管に其長生を神佛に祈り然れども天壽は限りあり遂に父歿し母も世を去り夫妻の悲歎限りなく日夜遺前に奔走し平素嗜好の物を焚し且つ其生前に奉事の足らざりしを深謝し而して涙下る見る者聞く者皆其孝心を感じしどぞ

其妻を種子と曰ふ記く婦道を守りて人其孝貞を稱す當時僻村の習俗として妙齡の子女私に通し甚しきに至りては其の通する所の男女の數多々と以て褐色となすの風わり（其詳細ハ不肖が調査セシ和氣郡風土中本山寺ノ師ト云ヘル所ニアリ但シ前年ノ教育雑誌ニハ斯ケ所ハ省署シテ載セリ）爲に種々の醜態を演すること多かりしと種子

等稀く歎息し女大學或は芝居釋史宇の貞節孝子忠侯の事蹟を引きて近頃の婦女子に繪し以て其行為を戒しめ業務を獎勵せしむる等の善行多かりしと以て當時の代官此夫妻に金錢若干を與へて賛美せし事各前後四回に及べり故に當時松山の人田中某（名ハドウヘイト開ケド）なる者遺話（俗に）をして各地方を巡回の際には必、むたね改七と云ふ名題を以て頗りに此夫婦を賞揚し大化衆人の摸範となるしめたるを以て其詳かなる事實は今は知るに由なし幕風塵々として松樹翠葉をなすの下茂なる蘿草の裡に碑石あり青苔滑かにして白鶴一塚の傍を臨ぐ處幽かに觀阿福源信士天保六未年五月十八日没秋屋妙壽信女空十二八月二十一日死亡の文字を見る是れ此の孝子貞節の娘第之術の祖父母にぞある

遺訓あり

一武士の魂は刀劍なり百姓の魂は錫鉄と云ふことを忘る

勿れ

一子孫に不義の行われば吾が靈位を祀る勿れ
一上納は必ず人に先んすべし

一牛馬は家の婢僕と思へ

一金錢の貸借は必大聲にすへし蓋し之を恥じて低聲となすものは返却なしがたき者多ければなり

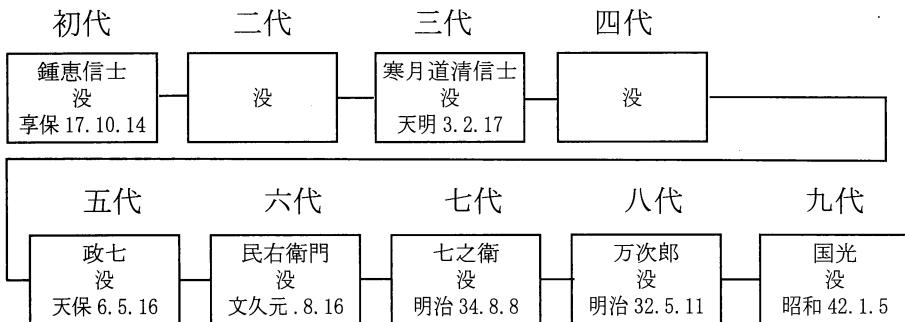
欄でこの記事（右紙面参照）を執筆し紹介したのが、当時県内の教育界でも広く知られた柳原繁太郎と云う人物で「和気の教育者・郷土史家」としても名が知れています。

柳原繁太郎については片廻二神系譜とも関係が深く『まつやま人・彩時記』（平成18年3月31日・松山市文化協会発行）で詳しく紹介されていますのでそちらを参考にして頂ければ幸いです。（松山市文化協会HP「まつやま人・彩時記・柳原繁太郎」参照）

様々な功績のあった柳原繁太郎は大正13年4月24日、66歳で没しますが片廻柳原系譜には後継者がなく、没後、繁太郎の「報恩碑」建立などで奔走した元村長の二神筆吉や他の関係者による相談の結果「選定家督相続人」として片廻二神系譜から選ぶことになり、昭和19年6月3日、二神喜代子家から当時3歳8ヶ月の4男輝雄が養子縁組して柳原家を継承し現在に至っています。

片廻二神系譜には系譜資料は多くは残されていませんが、柳原繁太郎が和気の郷土史家として調査研究した『母屋の昔語り』や『片廻昔語り』などの著書をはじめ絵画や書にも造詣が深く、多くの遺品が残されています。

【二神喜代子家略系図】



宗家片廻系譜二神喜代子家過去帳

	戒名	没年月日	俗名・続柄・その他の記録
1	玉葉童女	享保 17 年 (1732) 10 月 14 日	
2	鍾恵信士	享保 17 年 (1732) 10 月 14 日	
3	妙養信女	享保 17 年 (1732) 11 月 16 日	
4	妙室信女	享保 17 年 (1732) 12 月 3 日	
5	寒月道清信士	天明 3 年 (1783) 2 月 17 日	
6	春月妙光信女	天明 7 年 (1787) 12 月 13 日	
7	心照童女	文政 7 年 (1824) 11 月 5 日	
8	紅蓮妙遊信女	文政 8 年 (1825) 5 月 29 日	
9	覺智童子	文政 8 年 (1825) 9 月 21 日	
10	觀阿得源信士	天保 6 年 (1835) 5 月 16 日	政七
11	梅光童子	天保 9 年 (1838) 11 月 17 日	
12	秋屋妙壽信女	天保 12 年 (1841) 8 月 21 日	種子 (たね)
13	壯心自境信士	弘化 2 年 (1845) 10 月 16 日	民次
14	仙翁道齋居士	文久元年 (1861) 8 月 16 日	民右衛門
15	觀阿妙證大師	文久 3 年 (1863) 3 月 23 日	為右衛門妻
16	顕朋徹真居士	明治 30 年 (1897) 5 月 11 日	二神万次郎
17	貞心妙操大姉	明治 30 年 (1897) 5 月 11 日	万次郎室シゲ
18	春園童子	明治 34 年 (1901) 2 月 9 日	品吉長男・早雄
19	真月妙証大姉	明治 34 年 (1901) 8 月 8 日	品吉母・イハ
20	義寛道諦居士	大正元年 (1912) 9 月 25 日	品吉父・七之衛
21	隆光宗純童子	昭和 2 年 (1927) 10 月 30 日	国光次男・宗保 3 才
22	光徳院蓮臺上品居士	昭和 21 年 (1946) 4 月 25 日	国光父・品吉 73 才
23	光華院朝陽妙覚大姉	昭和 25 年 (1950) 6 月 11 日	国光母・アサノ
24	淨國院淡春常樂居士	昭和 42 年 (1967) 1 月 5 日	伴之丞父・国光 67 才

△二神史郎家聞き取りと資料調査

系譜伝承・古文書・過去帳・系図・家紋などについて

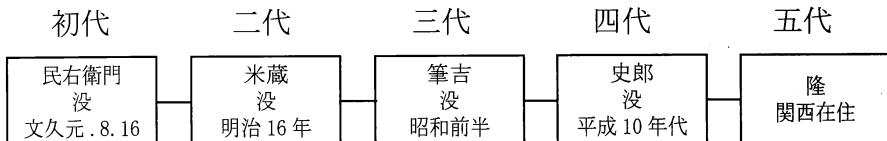
二神史郎氏は元会員で、二神会発足直後に亡くなられました。このため同家の系譜情報は確認されて居ません。史郎氏の父は元和氣村村長の二神筆吉氏で、八代目村長として昭和6年から4年間就任し戦前の世情が不安定な時代、また、松山市と合併（昭和15年8月1日）直前の厳しい時代、村の代表として奔走されました。また実弟の故二神昭二氏は愛媛新聞論説委員として活躍された方で史郎氏よりも早く世を去り惜しまれました。

生前に二神家の事は聞いたことがないので詳しい事は判らない。（史郎夫人）との事ですが、これまでの聞き取りや靈標、墓石調査の結果に基づく推察では二神史郎家は宗家片廻二神系譜の6代目民右衛門からの分家筋にあたると見られています。

墓地は片廻の村墓地にあり最前列左端に祀られています。「二神家之墓」と墓碑正面には刻まれていますが墓誌が確認できません。このため史郎氏の父で元和氣村村長の二神筆吉氏や祖父に当たる米蔵氏の系譜情報が確認が出来ていません。

また、民右衛門の娘、クマの系譜も事情により二神系譜として今まで継続されており、片廻墓地で祀られています。

【片廻系譜二神史郎家略系図】



【片廻二神系譜隆家略系図】（民右衛門の娘、クマの系譜）



4. 家紋調査

【本村二神系譜】

二神勘一家 抱き茗荷…………「船ヶ谷二神氏」系譜で紹介。

会報第10号参照

二神 孝家 抱き茗荷…………「船ヶ谷二神氏」系譜で紹介。

会報第10号参照

【片廻二神系譜】

二神 隆家 丸に五三の桐……「才之原二神氏」系譜で紹介。

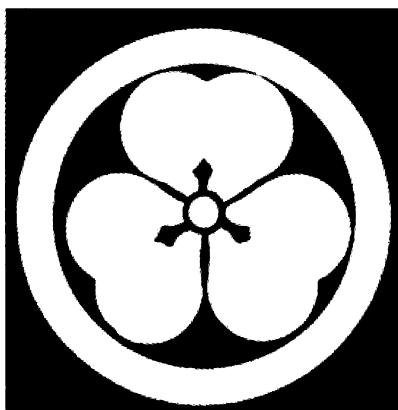
会報第15号参照

二神泰明家 丸に違い鷹の羽…「高山二神氏分家」系譜で紹介。

会報第14号参照

二神喜代子家 丸に片喰…………

二神 史郎家 丸に片喰…………



丸に片喰
かたばみ

【丸に片喰紋の由来】

片喰は道端や田の畦などに生えるありふれた雑草ですが、可憐な小さい花が咲きます。片葉が三つあるので「片葉三」と名づけられたと云われ。噛むと酸っぱいので、スグサ、スイモノグサなどとも呼ばれ、漢字では「酢漿草」とか「鳩酸草」とか書きます。また、古代にはこの葉や茎をすりつぶして鏡を磨くのに用いたので「鏡草」ともいわれました。昔から毒虫に刺されたとき、すりつぶした汁を塗ると腫れが引くとも云い、刈っても刈っても増えてくるたくましい雑草なので、この実を財布に入れておくと、いくら使っても金が減らないという迷信から「黄金草」とも呼ばれました。

これまでに紹介した二神氏系譜で「片喰紋」を使用している系譜はありませんが、使用家数の上では、日本の十大家紋のうちでは第二位を占めています。戦国時代に片喰紋を用いた有名な武将として

は土佐の長曾我部氏がいます。また、大河ドラマ「軍師 官兵衛」にも登場する岡山の宇喜多直家も採用していました。

実をはじかせながらも新しい花を咲かせる、つまり繁殖力の強さを、一族の繁栄になぞらえて「片廻二神系譜」は片喰紋を家紋として採用したのかも知れません。

5. 船ヶ谷二神系譜

△二神正男家（宗家）聞き取りと資料調査（平成19年9月24日調査）

系譜伝承・古文書・過去帳・系図・家紋などについて

（会報『海の民 ふたがみ』第10号参照）

船ヶ谷二神系譜については平成19年12月発行の会報第10号で紹介をしていますが、その紹介文のなかで「船ヶ谷二神氏の歴史」について触れた部分に「現在の松山市船ヶ谷町三石地区に江戸時代中期頃から居住しているのが船ヶ谷二神系譜です」とあり、続けて「船ヶ谷二神氏の位牌で最古の年代は1781（天明元）年8月22日に没した人物で、裏書きには「与八の父」と記されています。この人物が船ヶ谷の三ツ石に居を構えた最初の人物で、初代源右衛門と見られます。」と述べています。

このように、平成19年9月に「船ヶ谷二神氏」を調査した際の感想と課題を「太山寺系譜の解明が船ヶ谷系譜解明の前提である」と提起していました。それを項目別に列挙すれば次の通りとなります。

1. 船ヶ谷二神氏は初代源右衛門が元祖である。
2. 船ヶ谷二神氏系譜の菩提寺は松山市本谷（旧北条市）にある元天台宗雲門寺である。
3. 雲門寺は旧記によれば源平合戦で源氏方に付いた河野通清が建立したと伝えられる。
4. 源右衛門はどのような動機で風早郡粟井郷から和氣郡太山寺村船ヶ谷に来たのか。
5. 二神源右衛門の太山寺村船ヶ谷地区移転の背景はなにか。

6. 未調査の太山寺二神氏の系譜解明が船ヶ谷二神氏の系譜解明のための前提である。

7年前、調査部が船ヶ谷二神氏を取材・調査した結果、以上のような項目課題を提起していましたが、改めて当時の調査についてのポイント部分を、会報第10号より以下抜粋して見ました。

(以下、会報第10号から一部転載)

【船ヶ屋二神氏過去帳調査】

二神正男家からの聞き取りと墓地調査結果からの感想と課題

(平成19年9月24日調査)

船ヶ谷二神氏宗家の繰り出し位牌の中で最古の年代として残されているのは天明元年(1781)8月22日に没した人物で、裏書きには「与八の父」と記されています。この人物が船ヶ谷の三ツ石に居を構えた最初の人物で、初代源右衛門と見られます。この源右衛門の名は三代目まで襲名されていますが、この時代は他にいくつかの名前を持っていましたから、二代目が与八であることが判ります。この人物も後に源右衛門を襲名しています。それでは初代源右衛門はいったい何処から船ヶ谷へやってきたのでしょうか。これが船ヶ谷二神氏の系譜を語る上での最も肝要な事柄です。それを解くキーワードは船ヶ谷二神氏の菩提寺にあるのではないかと思われます。同系譜の菩提寺は松山市本谷(旧北条市)にある黄檗宗雲門寺です。

雲門寺は中世時代に建立された寺で、旧記によれば河野通清が建立したと伝えられています。建立当時は天台宗に属していましたが延文年間(1356~1361)に火災に遭い寺宝が灰燼となりました。河野通武(南氏)の時に七堂伽藍を創営し釈海が開基して臨済宗建長寺の末寺となりました。南氏5代の間、菩提寺として栄えましたが、天正13年7月、小早川隆景に攻められ背後の横山城落城とともに衰微しました。天和3年(1683)に古鏡がこれを中興し、宇治の黄檗宗萬福寺の末寺となり現在にいたっています。なお、小早川隆景に攻められた際、横山城に立てこもった南通具は一族郎党二百余騎

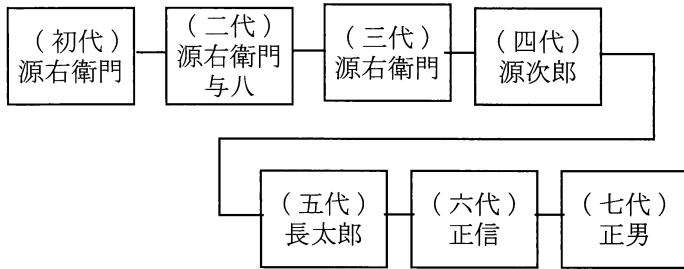
で応戦しましたが及ばず大敗。この地を去ることになった時、通具が南氏の菩提と興隆を祈念して植えたと伝えられる「南柿」（県天然記念物）が420年を経た今日なお雲門寺境内で実を付けています。

雲門寺が建っている松山市本谷は旧北条市に属し、藩政時代は風早郡粟井郷本谷村字寺の内の地名で呼ばれていました。粟井郷の二神氏で雲門寺を菩提寺としている系譜は現在までのところ確認されておりませんが、近辺の客二神氏（真言宗蓮福寺）、常竹二神氏（日蓮宗積善寺）、小川二神氏（真言宗蓮福寺）、を見ても黄檗宗雲門寺を菩提寺とする系譜は見あたりません。これを中世の風早郡まで広げ雲門寺と関係深い臨済宗や寺の創建時の天台宗まで遡ってみると二神氏との関係が見ええきます。

しかし、船ヶ谷二神氏初代源右衛門が仮に70歳で没したと仮定して天明元年（1781）から70年遡って考えてみると正徳元年（1711）頃に源右衛門が生まれたことになります。源右衛門が何歳で風早郡粟井郷から和気郡太山寺村船ヶ谷までやってきたのかも系譜に伝わる伝承などが未発見なので不明のままですが、この時代、何のために（動機・目的）どのような経緯で（経過）どんな気構え（決意）を持って来たかが問題となります。ただ、これを遡る20年前の元禄年間には、余戸二神氏（臨済宗善応寺）や上ノ谷二神氏（臨済宗善応寺）が風早郡から現地へ移転していることを考える併せるとき、二神源右衛門の太山寺村船ヶ谷地区移転の背景が見えてくるのではないかと考えます。また同時に、今まで未調査のままでなっている太山寺二神氏についても系譜解明が船ヶ谷二神氏の系譜解明のため必要であると考えます。

雲門寺過去帳

【船ヶ谷二神氏宗家源右衛門系譜】



(初代) 源右衛門 (秋月自香信士)

天明 1 年 (1781) 8 月 22 日没

妻 (春月妙輝信女)

天明 5 年 (1785) 2 月 4 日没

(二代) 源右衛門 (俗名・与八)

【畝順帳に残る船ヶ谷二神氏の所有地】(一部分)

甲 畝順帳 明治 10 年 2 月					
和氣郡太山寺村 4 冊の 3 内 1 ~ 3 号					
小字	地目	地番	面積	氏名	備考
三ツ石	1 ~ 201				
三ツ石	田	62	28 歩	二神 源次郎	
"	"	66	1 畝 29 歩	二神 源次郎	
"	田	73	6 畝 10 步	二神 與七	
"	田	83	3 畝 14 步	二神 源次郎	
"	"	84	4 畝 11 步	二神 源次郎	
"	"	88	5 畝 07 步	二神 源次郎	
"	田	89	3 畝 24 步	二神 太平	
"	田	90	1 反 00 畝 00 步	二神 源次郎	
"	宅地	96	6 畝 06 步	二神 源次郎	
"	畠	97	1 畝 20 步	二神 源次郎	
"	宅地	100	7 畝 08 步	二神 與七	
"	畠	117	0 9 步	二神 源次郎	
"	畠	140	1 畝 02 步	二神 太平	
"	畠	153	1 畝 25 步	二神 與七	
"	畠	166	1 反 00 畝 02 步	二神 源次郎	
"	田	188	1 畝 17 步	二神 源次郎	
"	田	189	4 畝 23 步	二神 與七	
三ツ石	~ 201				

【船ヶ谷二神氏過去帳調査】

河野通清が建立、源氏と繋がりの深い船ヶ谷二神系譜の菩提寺、雲門寺

雲門寺は天和 3 年 (1683) 年に古鏡がこれを中興し、宇治の黄檗宗万福寺末寺となり今日に至っています。

また、『伊予古蹟誌』によれば河野通清によって建立され延文年間の火災焼失までは 河野通忠の木像、河野騎長付きと曰く書き付け、後鳥羽院の書一通、鎌倉よりの下知一通、藤原清元の禁札一通、越智通武菩提所に位牌あり と記載され当時の鎌倉幕府と深い関係がある人物が登場します。

このように雲門寺は河野通清によって建立された事情もあり、創建当時から源氏との繋がりが強く長年、寺で保有していた寺宝には後鳥羽上皇や源頼朝からの書状が確認されていました。

二神系譜研究会調査部では平成 26 年 2 月 2 日、雲門寺調査を実施し、同寺に残されている史料の確認を行いました。その中で船ヶ谷二神系譜菩提寺の過去帳調査も行い、同系譜に関係する人物の諱、俗名等について戒名との照合を全て実施し確認しました。

その結果、船ヶ谷二神系譜の中で宗家系譜関係の人物には源氏に繋がる「源」の文字を諱、俗名等に四代に渡り使用していることが判明しました。また、前回「歛順帳」を調査したときの結果についても会報第 10 号に紹介している通りです。

前頁で雲門寺過去帳の一部を写真で紹介しています。ここには和氣村太山寺、船ヶ谷二神氏宗家系譜の 4 代目二神源次郎妻、ケイが、大正 2 年 3 月 10 日 69 歳で亡くなられた事が記載されています。このように雲門寺には再建後の江戸中期からの過去帳が残されていますが、船ヶ谷二神氏宗家系譜の人物が「源」の文字を通字として使用してきたことが理解できます。

船ヶ谷二神氏と友近名、二神源三郎について

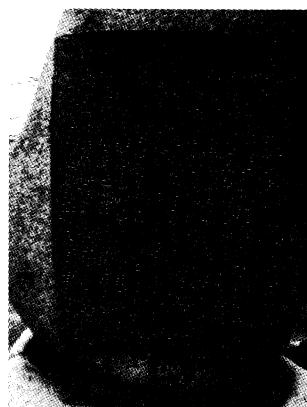


現在、神奈川大学日本常民文化研究所で保管する「本島二神文書」（文書番号 212）によれば、「天文二十一年十一月十八日付で河野通宣が二神源三郎宛に発給した「河野左京大夫通宣安堵判物」に「久枝郷之内友近名之事申付所也」とあり、湯築城主河野通宣が二神源三郎に対し、和気郡久枝郷友近名を給与する事を述べています。

旧記に「太山寺は久枝郷に属せし事ありしが…」と伝えられるように、旧太山寺村は天正 18 年までは久枝郷であったことが判っています。二神源三郎が安堵された友近名とは現在の「友近神社」の場所なのか、それとも他の場所の「友近名」を指しているのか、その面積はどの位あったのか、などについての調査研究や確認はこれまでなされていません。

ただ、云えることは「船ヶ谷二神氏系譜」の周辺に残されている菩提寺や先祖名の通字、地理的条件など諸情報が、この文書が伝える内容に登場する二神源三郎に最も近い系譜ではないかと推察されることです。

従って、今後は船ヶ谷二神系譜の初代人物、二神源右衛門の周辺情報を「河野左京大夫通宣安堵判物」が伝える「久枝郷之内友近名」や「二神源三郎」の情報、さらにこの時代、河野氏から二神源三郎宛に発給されている残り 2 通の古文書の解明を結合する調査研究活動が重要になると考えます。



友近神社由来記

二神文書の記述「和氣郡久枝郷友近名」を給与する

212 河野左京大夫通宣安堵判物

久枝郷之内友近名之事

申付所也

右早守先例之旨、進退

領掌不可有相違之状如件

(天文二十一年)

十一月十八日 通宣(花押)

二神 源三郎殿

6.まとめ

最後に、太山寺二神氏の系譜調査を終え見えてきたものや、今後の課題について提起しておきたいと思います。

片廻二神系譜

1. 太山寺二神氏の中でご先祖についての資料は、片廻二神系譜の宗家と見られる二神喜代子家から過去帳の提出がありましたので少しだけ内容の検討を行いました。同系譜の過去帳から見えてくる最古の人物は享保17年(1732)10月14日の同じ日に亡くなられた鍾恵信士、玉葉童女の親子、若しくは兄弟と思われる人物で、病気や自然災害なのか、その他の事故なのか明確ではありませんが何か事情があったと思われます。

また、同年翌月には妙養信女が、翌々月にも妙室信女が亡くなるなど家族内で不幸が連続した年で、系譜伝承の確認が気になるところです。

2. このように過去帳に残された記録からも様々な事が連想させますが、不思議に思えるのは享保17年(1732)から天明3年(1783)まで約50年間、家族内で誰一人亡くなった人物がいないのも不

自然です。また、天明7年(1787)から文政7年(1824)までも同様で、この時代の37年間は年月が開きすぎている感がします。

3. 宗家から提出された過去帳と墓石の碑面調査のみで最古の享保時代に没した人物夫妻を仮に初代と判断し、25～30年間で代替わりとし、不明な時代の当主を夫婦墓石の中から選び、系図落としをしました。結果、一部を除き9代まで約300年間のご先祖を推定することが出来ました。
4. 系譜調査を全面的に実施するには、菩提寺の協力も得ながら靈位調査(過去帳・位牌)と墓石調査と並行することで史実に近づけるものです。今後、本格的な墓石調査の実施を提起しておきたいと考えます。
5. 泰明家系譜には伝承がご遺族に伝わっていなかったようですが、同系譜は元々本村に居住していた可能性が考えられます。江戸後期からの墓石が本村墓地で確認されているので今後の調査次第ではもう少し具体的に系譜解明される可能性があり、家紋では太山寺系譜との共通点は見出せませんでした。
6. この他、片廻二神系譜出自の方々で近隣の町に住まわれている元会員の方もおられます。二神隆家は現在高浜町に居住されていますがこの度の系譜調査では資料の提供も頂きました。この他多くの関係者の方々にこの場をお借りして御礼を申し上げたいと思います。ご協力をありがとうございました。



友近名安堵状



友近神社境内

本村二神系譜

1. 今回、聞き取り調査では本村系譜の伝承は確認出来ませんでした。墓地は碑面調査を実施したのみで、江戸後期あたりからの墓石が確認されています。菩提寺等から考えても片廻系譜との接点は感じられません。家紋では船ヶ谷系譜と共に通する事が確認されています。
2. ご先祖が本村のご出身で現在は他地区に居住される二神久吉家からも証言を頂きました。今後調査を進める上での参考にさせて頂きます。どうもありがとうございました。

船ヶ谷二神系譜

1. 船ヶ谷系譜解明の要点を項目別に列挙し提起しています。内容が一つでも前進することは伊予の中世史、近世史研究にとっても喜ばしく、大きな歴史解明の成果に繋がる可能性があります。
2. 船ヶ谷二神系譜の会員を始め、関係者による「船ヶ谷二神系譜学習会」の開催を視野に入れながら今後とも調査研究を進めて行きたいと考えます。

【参考文献】

「本島二神文書」（写・二神系譜研究会 神奈川大学日本常民文化研究所所蔵分）・『伊予温故録』（宮脇通赫著 明治27年刊行）・『新編温泉郡誌』（松田卯太郎大正4年3月15日発行）・『和気をさぐる』（和気小学校編 昭和61年3月31日発行）・『伊予古蹟誌』（伊豫史談会双書第15集 昭和62年7月1日発行）・『和気のおもかげ』（創立85周年記念誌－松山市立和気小学校PTA編－平成6年3月31日発行）

会員さんからの投稿

わが二神家の歴史

横浜市 二神 和子

わが二神家の歴史について、亡き長兄の言葉を借りて述べてみよう。

二神家の遠祖は、その昔、天孫降臨より早々本土に降った饒速日命（にぎはやのみこと）の裔といわれる物部氏である。饒速日命は本土へ降った後、大和国を統治する豪族長髓彦（ながすねひこ）を扶けていたが、神武天皇のご東征にあたり、抵抗して一時東征の事業も頓挫したほどであった。天孫降臨民族の一人であった饒速日命は、長髓彦に帰順を奨めたが、肯んじなかつたので、之を殺して神武天皇に帰順したと神話に伝えられている。その忠義心と勇武が買われ、天皇の禁衛隊の地位につけられ、氏は物部を名乗ることとなった。

奈良朝の頃、中央政権たる大和朝廷の全国統一が堅固になると共に設けられた四道将軍の一人として、西海道（四国）を治めるため四国に派遣され、その後土着した一族が私たちの祖先であり、その後、姓を越智と名乗り、その子孫は四国ののみならず瀬戸内は言うに及ばず、九州・中国地方にも広くその末孫たる一族は分布発展している。

自然の増殖のみでなく、積極進取の祖先譲りの気性と強力な武力による四方への進出が考えられるが、鎌倉時代の元寇に際し西方の国防のため、全国から防守が集められた時、我々の祖先も駆り出され、我々の一族に属する河野通有が敵の上陸を待たず小舟に分乗し、敵艦に攻め寄せ敵の心胆を寒たらしめる勇戦をした話は有名である。この河野氏は、前にも触れたとおり、越智氏より分かれた有名な一族なのである。また、越智の一族（河野氏を含めて）の者の名前には、必ず「通」の字一字を付ける慣わしとなつておると聞いている。因みに我が家は、自分の祖父にあたる正近が越智氏から分家して、二神家初代となつたのであるが、祖父の兄にあたる人は越智通政を名乗っていた。

越智の一族は大きな勢力を持った氏族であるが、私たちの近祖は明治維新までは伊予（愛媛県）の松山藩藩士として、また、剣術指南役を務める家だったそうである。父・高太郎から聞いた話によると、父の幼少時、松山市内に2, 3か所剣道を教授するための町道場が残っていたそうである。

祖父・正近もお家柄であろうか剣術の腕は立ったようで、維新後は、今の言葉でいう警察官、新政府の新制度たる邏卒を職としていたそうであるが、西南戦争の折、薩摩の武士兵に対抗するため臨時に急編成された政府軍（官軍）の抜刀隊に志願したが、田原坂の激戦激闘も漸く鎮台兵側の勝利に終わり、薩摩軍も敗退につぐ敗退により遂に戦争も終わり、実戦には出ずじまいだったようである。

「二神」の姓に変わった経緯も、時代の反映の一つとして興味ある話でもあるので紹介しておく。法律的には二神家を勝手に創氏することはできないわけで、越智家から二神家へ養子縁組をした結果、二神氏に改姓したのであるが、その改姓の目的が明治維新後兵制改革により徴兵制度の新設による鎮台兵士に徴募されることを嫌したことによるのだそうである。国民皆兵制の創設当初は、家族制度の維持を重視する改正の表れで、家督を相続すべき長男は徴兵免除という恩典が与えられたそうで、武士だった者が将校ならともかく兵隊として徴収されるのを好まなかつたので、事実上の養子縁組ではなく金を以て二神の姓を買ったのだと聞いている。だからと言って、別に非国民だったという訳ではなかろう。

本家にあたる越智家では、父の従兄越智茂は陸軍士官学校へ進み、日露戦争には小隊長として出征、乃木大将の第三軍に属し203高地の攻略に参加して九死に一生を得て戦功をあげ、金鷲勲章功五級を授けられている。（以上、長兄の残した文を引用。）

長兄の残した文により、わが二神家の歴史について述べてきた。古代の記述については確かめる術はないが、明治維新の徴兵忌避などについては調べてみたいと思う。

飯室河野氏と二神氏との関係

河野 修興

旧飯室村（旧・安芸国高宮郡。現・広島市安佐北区安佐町）祝氏である飯室河野氏の歴史は、天文20年（1551）、三入高松城主熊谷信直公より、飯室河野氏初代河野甚五右衛門尉が飯室村祝氏に任じられた事に始まっており、平成26年（2014）で463年となる。この際の事情を記した書付は、長く河野家に伝わっていたが、文政5年（1822）の大火により、他の多くの古書類とともに焼失したため、その間の事情が不明になった。

愛媛大学川岡勉教授のご意見では、「天文20年に、熊谷信直公より神官に任じられたということから、厳島合戦で毛利氏が霸権を握る以前に、伊予から安芸に渡ってきた人物であり、熊谷次郎直実の子孫である熊谷氏と関係を結んだ一族と考えられましょう」と述べておられる。天文11年（1542）に始まった「天文伊予の乱」において大内氏に与した河野一族の一派であると推定すべきであろうということである。

飯室河野氏は、平成6年に広島市から重要文化財に指定された4通の「土井泉神社文書」を所有している。文書は、天正17年（1589）、天正19年（1591）【写真1】、文禄3年（1594）、文禄5年（1596）に毛利家の代官などから、飯室河野氏第2代の祝師河野神右衛門（若名 弥太郎）に対する、神田安堵状、銀子請取状などである。この時代は太閤検地が行われた時期である。水田の広さが、売買された米の値段（貫）によっていたそれまでの検地から、生産された米の重量（石）による検地へと変更されたのである。最初の1通には貫、2通目は貫・石併用、3通目と4通目は石のみで標記されており、同一地域で同一人物に対して出された文書によって、検地法の移り変わりの様を覗い知ることができるため歴史上の価値が高いとされている。この4通はもともと昭和期に広島県文書館に登録された「土井泉神社神主河野家文書」であり、広島市教育委員会が過

誤により「土井泉神社所有文書」として広島市重要文化財に登録していたが、河野修興の申し出によって平成 21 年、本来の河野家所有文書として訂正された。

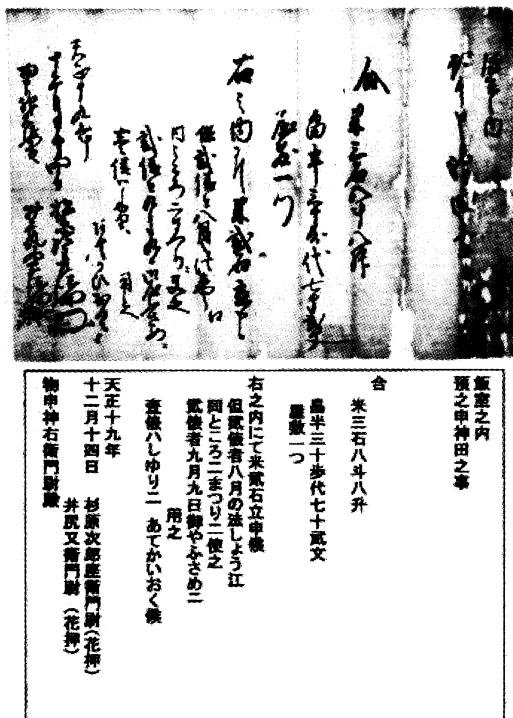


写真 1.

天正十九年 毛利家の代官から第二代河野神右衛門に宛てられた文章
(広島市重要文化財 土井泉神社文書)

第 5 代の河野吉兵衛までは無官の祝師であったが、6 代の河野近江守藤原正秀から江戸期末の第 9 代従五位下河野阿波守藤原正敬までの四代にわたり京に上って拝官した。江戸期に全国の神祇官を統率していた京都吉田家の配下として働いていたとの覚え書きがある。河野阿波守藤原正敬（まさゆき）の宣旨【写真 2】を写真で供覧する。従五位下阿波守を拝官していたため明治維新後、第 10 代河野兵馬（第 2 代飯室村村長、医師）は士族に編入された。

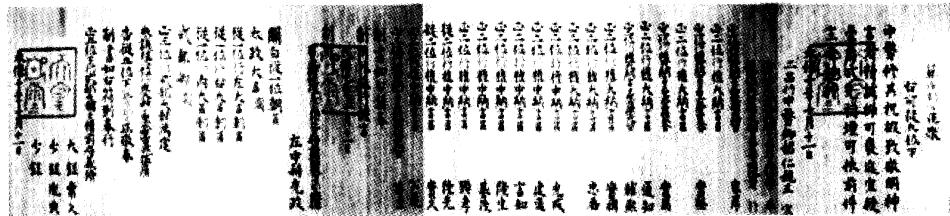


写真2. 第9代河野阿波守藤原正敬への従五位下の宣旨

社家である飯室河野氏の特異な点として、江戸期から当主は代々飯室村の社掌と医師を兼ねていたことである。神祇官の務めは、流行病や飢饉の克服にあることは明白であり、医師を兼ねたものであろう。第11代の河野遠二（明治6年生）は広島市安佐南区沼田町阿戸の阿戸氏（本姓 森；美濃の大族であった有馬中将森親足子孫）から婿入りしたものである。大正9年の第1回広島県医師会代議員会に安佐郡の代議員として出席している写真が残されている。

第12代の河野正實（筆者の父：明治44年7月30日生）は千葉医科大学を卒業し、千葉医大第2内科に在籍していた昭和18年に徴兵により陸軍軍医少尉として南方に出征した。乗船した病院船ブエノスアイレス丸がB24に撃沈され、太平洋を7日間漂流したという苦難にさらされた。この正實の妻である莊（ひろ：大正12年8月16日生）が、二神本島の二神家から吳市音戸町先奥にある元割庄屋筆頭格丸石家に入婿した隼人（幼名：隼太郎）【写真3】の孫であったこ



写真3. 丸石隼人（幼名：隼太郎）
瀬戸島村 戸長、
初代（明治22年～）
・2代・4代村長
伊予二神島二神種式の長男

とから、飯室河野氏と二神氏は血族となった。

丸石隼人は明治維新後の廃藩置県後、音戸町の前身である瀬戸島村の戸長、初代・2代・4代村長を務めた。その長男である丸石寿大（かずひろ）【写真4】は、大正4年、34歳の時から音戸町第13・15代町長、昭和10年からは広島県議会議員を務めた。音戸造船を経営、広島県造船協会会長などの公職も務めた。この間、倉橋島にバスの通行可能な道路を整備し、本州側の呉と音戸町を連結する音戸大橋の架橋に成功している。



写真4. 丸石寿大（明治16年生）

丸石隼人の長男

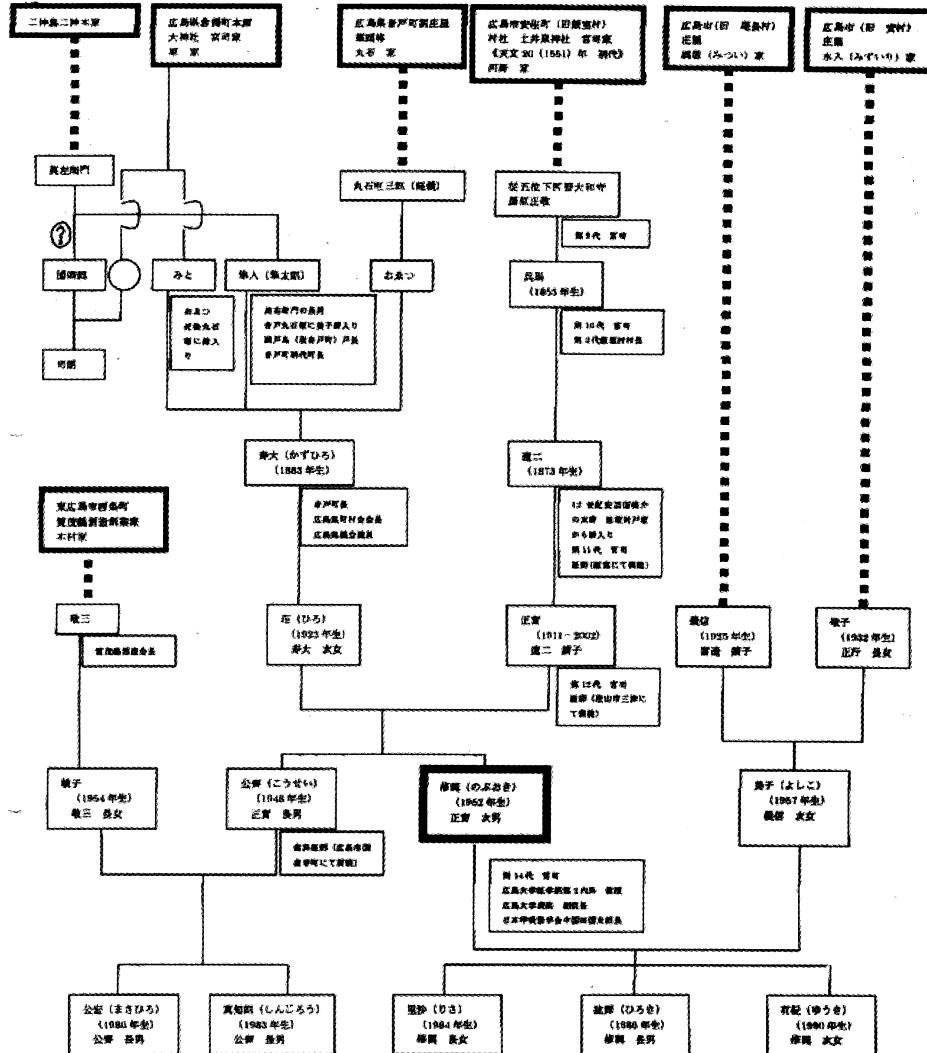
音戸町第12代（大正4年～）

・14代町長

広島県議会議員（昭和10年）

筆者河野修興（呼吸器内科専門、文部科学大臣賞科学技術省受賞、保健文化賞受賞、天皇皇后両陛下拝謁）は、旧飯室村（現、広島市安佐北区安佐町飯室）御鎮座の旧飯室村八幡宮、現 土井泉神社の宮司を務める傍ら、平成12年から広島大学大学院医歯薬保健学研究院分子内科学教授（旧第2内科）を務めている。その間、広島大学医学部医学部長（平成18～22年）を併任した。現在は、教授と広島大学病院呼吸器内科科長、広島大学学長特命補佐を務めている。

広島県広島市安佐北区飯室河野氏二神系譜（平成 16 年現在）



二神寛治が筆記した『海水浴法概説』の紹介

齊藤 文嗣

少し前になるが、平成 19 年（2007）8 月から 10 月にかけ、国会図書館において「わたしたちの健康法」と題する小さな展示があった。近世以降の衛生、栄養、運動にまつわる健康法の文献紹介であった。現在を生きる私たちのさまざまな健康食品、サプリメントへのこだわりや、ジョギング、ウォーキング、水泳、ヨガなど運動への取り組みは、ほかならぬ「わたしたちの健康法」である。この展示はこういった健康ブームの起源と歴史を展望しようするものであった。今たまたま、手許にあったそのときのパンフを手にしながら、この文章を書きはじめている。

展示文献の筆頭に、近世を代表して貝原益軒の『養生訓』があげられている。そしてすぐ「近代の健康法」とつづき、まず「衛生の誕生」の項目で、明治 11 年（1878）発行の『養生談：小学口授』という小学校教科書が紹介されている。そして次の項目「過熱する健康熱」の一番目に、ここで紹介しようとする『海水浴法概説』／松本順著 二神寛治記 東京：二神寛治 1886.8 が登場する。そのあと数冊の紹介があって、漱石の『吾輩は猫である』（明治 39 年、1906）からの文章が引用紹介されている。この小説のちょうど中ほど、「七」がつけられた「吾輩は近頃運動を始めた。」ではじまる猫物語の、数行あとの文章である。

運動をしろの、牛乳を飲めの冷水を浴びろの、海の中に飛び込めの、夏になつたら山の中へ籠って当分霞を食らえのとくだらぬ注文を連發する様になったのは、西洋から神国へ伝染した輓近の病気で、矢張りペスト、肺病、神経衰弱の一族と心得ていい位だ。

『海水浴法概説』（以下『概説』）が出版されてからちょうど 20 年、「過熱する健康熱」への皮肉たっぷりの一文である。

ところで松本順は、海水浴の啓蒙家の一人として必ず挙げられる

人物である。数年前に出版された、優れた海水浴史『海水浴と日本人』（畔柳、2010）によれば、明治初期の近代海水浴の始祖は、長与専斎、松本順、後藤新平、この三人に尽きるという。長与と後藤は『概説』に先立つこと数年、それぞれ海水浴の啓蒙書を出版している。ちなみに当時、海水浴は「カイスイヨク」ではなくて「ウミミズユアミ」と読まれたそうである。つまり古来の「汐湯治」のニュアンスが強かったのである。

実はこの三人の啓蒙家たちは、欧米の医学を学んだ当時の医学界、医療行政のリーダーであり、医師の立場から日本の近代化に取り組んでいたのであった。海水浴がさまざまな病気の治癒に効果が顕著であると主張する（汐湯治）一方で、国民の公衆衛生、健康増進は富国強兵の一環ともなるとして、啓蒙に努めていたのだ。だから、現在私たちが海水浴にいだく、スポーツ、行楽、娯楽、家族イベントといった意味合いは、後になって少しずつ付け加わり、濃くなつていったものだといえよう。

先の畔柳書によれば、この三人に加えて海水浴を大衆化するために顕著な働きをした先人がいないでもないが、文献を精査してみて松本順の名前が圧倒的に多く見聞されるという。軽井沢とならんで別荘地、保養地の別名ともなっている大磯の、海水浴場開発の唱道者であったからではないだろうか。

松本順の自伝（1980）および伝記（鈴木、1933）によれば、彼に海水浴の治療効果を示唆したのは、順の父佐藤泰然（順天堂の始祖）と、長崎医学伝習所での恩師ポンペであったという。加えて患者、友人、そして自らにも試してみて、その効果に強い確信を持ち、熱心な啓蒙活動に乗り出したのだという。全国の多くの海岸を実際に見て歩き、彼いうところのすべての最適条件を兼ね備えた大磯なる地をついに見つけ出したのだった。

明治に入って宿駅制がなくなり、急速に疲弊の度合いを強めていた大磯の町の人々に海水浴場開発の協力を説いてまわるが、最初は聞く耳を持たなかったようである。しかし、少数ながら徐々に、熱

意ある説得に賛同する者があつて順を勇気づけた。明治 17 年のことであった。努力実って翌 18 年、やっと本格的な海水浴場が大磯に誕生したのであった。ただし、大磯は日本における最初の海水浴場ではない。当時すでに、東京湾岸各地や湘南の片瀬、江ノ島、由比ヶ浜など、先駆的な海水浴場はあつた。

『概説』の発行はさらに翌年、明治 19 年のことであった。当初なかなか思うように大磯に人が集まらないなか、宣伝啓蒙パンフとして全国に向けて発信、発行されたのであった。

順の伝記作者である鈴木要吾は、つぎのようなエピソードも書き残している。明治 20 年(1887)に汽車が東京から国府津まで延び、さらに明治 22 年(1889) 東海道線が全通するにいたるのだが、鉄道技師は当初、平塚から小田原までは駅は要らないものと計画していた。ところがこのことを聞き知った順は、伊藤博文、山縣有朋あたりを説得してまわって、小規模ながら大磯駅を設けさせたのだという。一寒村になりかけていた大磯の、その後の目覚ましい発展は、ひとえに順の功績に帰せられるべきものだと鈴木はいう。

大磯の人々はこの恩義に報いようと、拠金を募って別荘を建てて松本順に進呈し、称徳碑まで建てたのだという。明治 25 年(1892)、61 歳になった順はこの大磯邸に隠棲している。

さらに鈴木要吾は、明治 40 年(1907) 76 歳で順が他界するまでに、大磯に別邸を構えた人たちは数百名おり、そのうちの数十名を列挙して、「實に天下の貴顕を集め尽くした」とまで書いている。鈴木によって何人かを具体的に挙げてみよう。岩崎彌之助、稻葉子爵、奥田子爵、山縣有朋、徳川義恕候、三井養之助、伊藤博文、鍋島直大候、西園寺公望候、徳川頼倫候などなど。鈴木いうところの「天下の貴顕」に、順と二神寛治も挙げられて入っているところが面白い。もちろん、我が二神寛治は、大恩師たる順の隠棲に付き従つて大磯に別邸を設けたのであろう。

『概説』に戻ろう。内容は見られるとおり、概ね肯定できるものである。熱中症に注意しようとか、紫外線の過剰照射は皮膚癌の

原因にもなるとか、ある種のアレルギー性の皮膚炎に著効があるとか、こういったことを新しく付け加えると、啓蒙書として現在でも大略通用するのではないだろうか。文中の海水の含有物の数字の単位は g/kg と考えられるが、現在の値ともさほど隔たったものではない。ただあくまでも「汐湯治の勧め」の域を出るものではない。

締めくくりに、二神の系譜と海水浴との接点について今後の課題を記しておこう。小さなパンフにすぎない『概説』は、全国に流通してよく読まれたらしい。もちろん愛媛の地でも手にされたものと推測される。少なくとも本書の口授筆記者であり発行者でもある二神寛治は、物心にわたり援助を受けた余戸二神の当主、兄二神精一には読ませたものと推察される。

この二神精一はなかなかの事業家でもあったらしく、手がけた事業の一つに、伊予鉄道の敷設が含まれている。余戸二神系譜の二神美知子さんの話によると、二神精一は伊予鉄道の計画段階で、「余戸あたりの土地はみんな私のものだから、ここを通る線路は遠慮なく一直線にまっすぐ引いてよろしい」と言ったそうである。その通り、伊予鉄道は現在でも余戸あたりはまっすぐに走っている。

わが伊予の国愛媛は、波静かな瀬戸内に面し、また複雑な海岸線をも持つ、美しくおだやかな浜辺に恵まれている。伊予鉄道と海水浴場、この 2 つが結びつく要のところに松本順、二神精一、二神寛治の三人がいるような気がしてならない。どなたか、このことの確証に取り組んでみていただけませんか。

参考文献 :

国立国会図書館第 149 回常設展示パンフレット

『わたしたちの健康法』2007.

夏目漱石『吾輩は猫である』(『夏目漱石全集 第 1 卷』筑摩書房、1965.)

畔柳昭雄『海水浴と日本人』中央公論社、2010.

『松本順自伝・長与専斎自伝』平凡社 (東洋文庫)、1980・

鈴木要吾『蘭学全盛時代と蘭畴の生涯』

東京医事新誌局、1933. (伝記叢書 137、大空社、1994 復刊)

『海水浴法概説』（現代文訳）

正五位松本順先生口授 門人筆記

海水浴法概説全

杏陰書屋蔵版

明治丙戌 蘭疇 

海水浴法概説

陸軍々医総監正五位松本順先生口授

二神寛治筆記

海水浴は病気を治療するだけではなくて、健康な身体をもますます健康にするものである。その効果を考えてみると、地上の寒暖、空気の乾湿、風や潮の方向によって多少は異なるが、皮膚の知覚神経を刺激し、循環器系統の働きを高め、海水の流れと圧力に抵抗して筋肉を動かすことなどが、主要なものと言える。だから海水がきれいに澄んでいて、川の水が混じっていない、海底も汚泥が沈澱していない清潔なところを選ぶのがいい。また潮の流れについても、身体を浸すのに危険の恐れのないところがいいだろう。また海水の濃度は高い方がいいので、南に面した場所が好ましいといえよう。ムルデル氏の調査によると、海水の成分は次の表のごとくである。(単位 g/kg?)

食塩 25.2 コロールマグネシウム 3.4 硫酸マグネシウム 2.9
炭酸石灰 2.4 炭酸マグネシウム 0.4 炭酸石灰 0.2 その他ヨジウム、プロミューム、カリ、鉄、マンガンなどを少量ずつ含んでいる。とりわけ夏は食塩の含有量が多い。

初めて海水浴をする人の皮膚が赤くなって、痒い発疹が出ることがある。しかし、これは塩分と暖かい空気の刺激によって、すぐに消えるものである。だから海水浴に慣れると治癒するものであるから気にしないでいい。

海水浴をしようとする人の病気の有無は、あまり問題にしないで

よい。その人自身が爽快な気分を味わうことができればいいのである。ただし、病気の人でその治療効果に疑問がある場合には、医師の適切な指示に従った方がいい。これまでの研究によれば、およそ次のような病気の治療に効果があるとされている。

第一 体質を改善し、食欲を改善する

結核性腺病質。遺伝、梅毒、あるいは生まれつき虚弱で栄養不良の人。瘰歎症(首のまわりに、グリグリができている人?)や梅毒性の症状あるもの。喉や気管支にカタルを反復しやすい人、つまり風邪をひきやすく、咳の出やすい人を指す。生まれつき皮膚が蒼白で筋肉質でない人、などに効果がある。

第二 新陳代謝や分泌機能を促進する

血行を盛んにし、体を温め、利尿効果もあり、消化液の分泌を促す。だから冷え症の人、肥満の人、胃腸の働きの弱い人などによい。

第三 さまざまな衰弱症状を回復させる

栄養、神経、筋肉の機能が減衰した人。例えば、さまざまな炎症、チフスやジフテリアなどの急性の重病や長期の病気後の衰弱、栄養不良により神経の働きがぶつって筋力が減衰しているもの。食欲の減退、消化不良、過度の勉強に起因する心身の衰弱。ただし、重い致命的な症状が、既に消失した人に限る。

第四 貧血症状を治癒する

貧血症。萎黄症(黄疸?)。間歇熱(?)のあとの貧血。産後の衰弱。貧血に起因する心悸亢進、身体の倦怠感、頭痛、眩暈など、神経の過敏なるもの。

第五 皮膚や粘膜を鍛錬する

皮膚が弱くて過敏なために気候の変化に順応できない人。例えば、風邪をひきやすい人がこれに該当する。皮膚病にかかりやすい人。他の症状が無いのにもかかわらず寝汗をかきやすい人。慢性膀胱カタル。婦人科の病気、ことにコシケの患者。

第六 消化機能を整えて増進する

胃弱または慢性胃カタルに起因する食欲不振。消化不良。呑酸嘈ソウ（胃酸過多？）。食後の停滞（？）。慢性便秘症。慢性胃痛症。

第七 神経および精神的諸病

慢性頭痛。顔面痛。胸痛。各種神経痛。ヒポコンドリー。ヒステリー。（ただし脳膜炎後のこの種の発症には効果はない）。

このほか、肺病、気管病のような病氣にも海水浴をおこなう。冷たい風が吹かない空気がきれいな土地で夏の炎暑のころの海水浴が非常によい。海辺の空気には塩分が含まれ、水分や養分に富み、多くの場合に気候は平穏で気温の変化もおだやかである。だから体力を養うことができるのである。

おしなべて海水浴を行うものは、体重が増加し、尿中の尿素が増える。これは、すなわち新陳代謝が盛んになり、食欲が増加し体力がついたという明らかな証拠と言えるだろう。しかし、末期の肺病のような極端な場合には、残念ながら地上のいかなるところにいようと手の施しようがないことはいうまでもない。

呼吸器と心臓の病氣などに海水浴の効果を研究した人たちの意見は一致していない。ある人は心臓の脈拍を減らして呼吸の回数を増やすからよいと言い、ある人は全く逆の説をとなえる。そもそもその原因がさまざまに異なるのだから、患者自身が三回くらいまでは試みて、経過を見て中止することになっても、それほど害はないだろう。ただし、呼吸器や心臓の重病者やその他の大病の末期で、衰弱の激しい患者などに海水浴を勧めるのは論外である。

これまでの研究によると、海水浴に適している自然条件は、海上の気圧は高い目で平均 760 ミリメートル、海水の温度は夏には 22

度から 28 度である。こういった時には波が海の底と表面を攪拌して温度差を消去してくれる。

海水浴が健康によいのは、自ずと運動していることになるからでもある。波の動きが全身を揺すり、マッサージ効果をもたらす。また、皮膚を太陽にさらし、波間を歩いたり泳いだりしては全身の運動となり、これらすべてが衛生上の要請にかなっている。

海水浴の方法

それぞれの人の体力によって異なることなく、おしなべて満潮になり始める時が適している。一回につき 30 分くらい、12 時間で 2 回海に入ればじゅうぶんであろう。そして少しづつ習慣にしていって回数を増やし、多ければ多いほどよいだろう。真夏の太陽が照りつけるような日には、干潮から満潮になるまで海に入ったり出たりしてもよい。とりわけ潮の流れが激しく、波が高いような場所がよい。

だからといって、白波が立って怒涛になるような日には、甚だ危険であるから海に入ってはいけない。ただし、このような日でも、岩場では空中にしぶきが飛ぶようにして強いさざ波が白く泡立つて、水量は少ないがその勢いが鋭くなつて、肩や背中、後頭部を水勢が叩き、あるいは海水が患部を刺激し、波に混じった砂が皮膚を摩擦してくれる。その勢いは非常に激烈であるが、人が立っていることさえできれば、危険の心配もないで、かえって知覚神経を刺激して海水浴の後は甚だ爽快である。しかしながら、長時間にわたつて水中にいると、腹部が冷えて不快感を覚えることがある。こんな時には、すぐに海から出て腹部を摩擦するとすぐに治ってしまうものである。このような腹部の不快感が海水浴中に生じることがあっても、気にする必要はない。

漁師の子どもたちは、海で遊泳して終日飽きることがない。そして、浜辺の熱した砂の上に腹ばいになつては、胸や腹部を温めている。はじめてこの様子を観察した時には、けつして身体にはよくないうであろうと思い、土地の人に尋ねてみた。すると、これまで熱し

た砂に触れて腹部の病気に罹ったものなど皆無であるという。炎熱の季節の午後の砂浜は焼けるように熱くて、歩くこともできない。だから海水で冷え切ってしまった身体を砂の上に腹ばいにして病気にならないわけがないだろう、と最初は土地の人の主張に疑問を持った。しかしながら、漁師の子どもたちをよく観察してみると、みんな鉄のように頑強で健康にあふれています、病気の気配などは全くない。そこで私も海水で冷えきって不快になった腹部を、子どもたちにならって熱い砂で温めてみた。その心地よさは言葉にはならないほどであった。まるでカイロで腹を温めるような心地よさで、最初は焼けるような熱さを覚えるが、そのうちに熱さが不足するようを感じる。ためしに浜辺の砂をすこし掘ってみると、湧き出てくる海水はほのかに温かい湯のようであった。このような愉快をもつて、私の疑問が氷解したのであった。それからというもの、自分自身でも子弟にも、胃腸病の患者にも試みたが効果は顕著であった。その地で暮らしている人が実際にやっていることを軽んじてはいけない。海水浴は自ら試してみて、その心地よさを味わってみるべきであろう。未経験の人の話を生半可に信じてはいけない。（訳者注：不明の箇所は適宜、括弧？などで補った。）

海水浴法概説 終

明治十九年七月八日版權免許

同年八月 出版 定価金十錢

口授者 静岡県士族 松本順 牛込区馬場下町三十五番地

筆者兼出版人 東京府平民 二神寛治

京橋区南鍋町二丁目二番地

発兎 東京日本橋区馬喰町二丁目

島村 利助

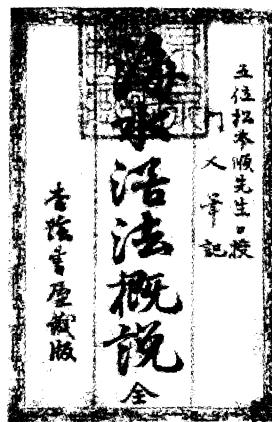
書肆 同本郷区春木町三丁目

同 支店

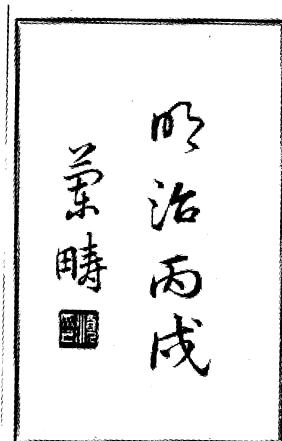
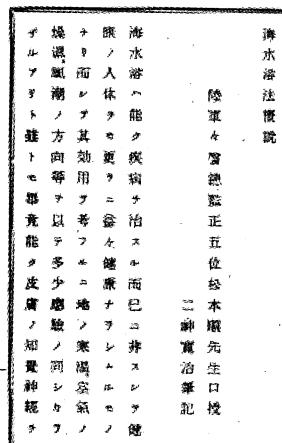
壳捌 同日本橋区通三丁目

丸 善 書 店

同	同神田区淡路町一丁目	巖々堂
同	大阪心斎橋通南堺丁目	松村九兵衛
同	同心斎橋通北久宝寺町角	三木佐助
同	相州大磯駅南下町	宮代新太郎
同	越中富山中町	増山吉次郎
同	播州三木福井町	八達堂



「海水浴法概説」の表紙



新古今和歌集

溝田 孝一

縁あって、新古今和歌集、室町時代応永 12 年（1405 年）古筆仙台、伊達藩主所蔵から、松江、出雲、松平藩主所蔵、杉田玄白所蔵そして、仙台、伊達藩木村医宅の蔵へ、それから第二次世界大戦後に米国の名門「コロンビア大学」へ 30 年間貸出され、返還されたところで、小生の手元に落ち着きました。

NOTE

コロンビア大学の概略

- 1、研究大学として有名でノーベル賞受賞者を 101 名輩出
- 2、リサーチ大学として過去 11 年間連続第一位
- 3、2012 年度の DATA によると 34 名の各国大統領や首相を輩出。
第 44 代大統領巴拉ク・オバマもこの大学で学んだ。
- 4、米国初の原子核分裂に成功。
- 5、大学が所有する特許などのライセンス
収入は全米第一位



コロンビア大学に貸し出された大きな理由は学術研究目的でした。この大学の研究水準は日本には無いものがあります。MR I 装置を含めた七種類の分析機器を駆使し、断層画像、和紙に含まれる物質、年代測定、美しい日本語等の分析をすることでした。研究を終え、美術館展示後、殆どの和歌が返還されましたが、一部、中納言隆家などの和歌はドイツの大学に貸し出され、アメリカの美術財団経由で平成 26 年 3 月、日本に戻って参りました。MR I 装置などを使用して解析すると 1 枚 \$1,200 (12 万円) のコストになるそうです。

私たちの先祖が詠んだ和歌がコロンビア大学からボストン美術

館、シアトル美術館、メトロポリタン美術館、シカゴ美術館、その他主要な美術館に、そして大英帝国美術館、ヨーロッパの大学にも貸し出されたそうです。

「新古今和歌集 卷第9：離別歌 国家大観番号874」の中に中納言隆家、16歳の時の和歌がありますのでご紹介しましょう。

長徳元年(西暦995年)4月10日父43歳、摂政関白、道隆亡くなる。同じ年、藤原実方、事件を起こし、一条天皇(皇后は隆家の姉、定子、)の命によって陸奥守に左遷される。その際、友人の藤原隆家(道隆と高階貴子の子)から贈られた送別の歌。

実方朝臣、

陸奥国(みちのくに)に下り侍(はべ)りけるに、餞(はなむけ)すとてよみ侍(はべ)りける。

中納言隆家、

別路はいつも嘆きの絶えせぬにいとどわびしき秋の夕暮
「通訳」

人との別れはいつも嘆きの絶えないものであるのに、
今はもう秋いっそう悲しい秋の夕暮れです。

返し

とどまらむことは心にかなへどもいかにかせまし秋の誘ふを
「通訳」

都に留まっていることは願うところですけれども、どうすればよいのでしょうか。暮れゆく秋が一緒に行こうと誘うのを。

NOTE

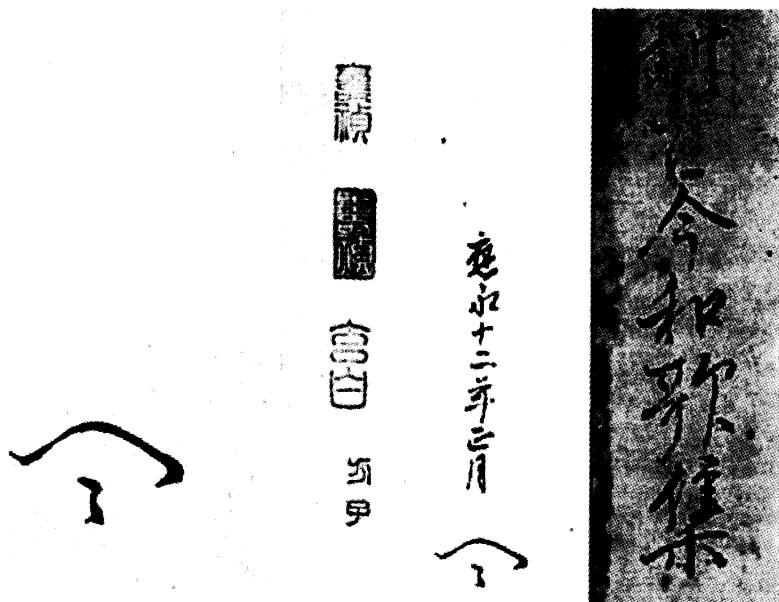
新古今和歌集について

鎌倉時代初期1201年、後鳥羽上皇の勅命によって編まれた勅撰和歌集。

源通具、六条有家、藤原定家、藤原家隆、飛鳥井雅經、寂蓮の6人に撰者の院宣が下り、1205年完成したものである。

この新古今和歌集は近年の研究でいくつか明らかに間違いである部分が分かりました。ご先祖様に関連している部分を上げると、離別歌の「隆家」のと

ころですが、「実方」の返しの和歌が別のところに閉じてある。又、法成寺入道、「道長」とすべきところを法性寺入道、「忠通」としている。本物かどうかを見極める時には修正しているかどうかでも分かります。参考まで。



MR I 装置を使用した画像は新聞紙の半分の大きさです。コロンビア大学のロゴが入った画像を観て下さい。そして、ご先祖様が詠んだ美しい和歌をご覧下さい。

断層画像（MR I）写真を公表することの難しい点は、この技術が「スーパーノート」と言われる偽ドル技術と深く関係しています。「スーパーノート」は公式には「C-14342」と称されています。

100 ドル紙幣の肖像には肉眼で見えない 0.6 ミクロンの文字が隠されていると同時に「U S 100」の文字が入ったポリエステルの糸が漉き込まれています。断層画像(MR I)写真ではこの部分を識別、判別することができます。その他、135 種類の物質が含まれています。よって、偽ドル紙幣は簡単には作れないようになっています。

新古今和歌集の原本を断層画像（MR I）写真で観るとわかるよ

うに、肉眼では視ることができない繊維の一本一本をミクロの世界で視ることができます。

科学的で客観的な分析データを重視するアメリカの航空宇宙局（N A S A）の技術によるものです。研究に関する論文の情報、断層画像（M R I）写真にはアメリカ連邦政府の予算が含まれ、財務省を含めた関係機関が関与して、主要部分が機密と指定されています。従って、新古今和歌集の断層画像も一部分のみの公開です。（肉眼では識別できない和紙や墨、含まれる成分などの詳細な情報を分析したデータ画像はフィルムの四隅に記載されていますが、機密指定事項）

年代測定は内部の組成分析の結果、中に含まれる成分などの特性から江戸時代のものでは無く、京都で作られた室町時代のものであるとの分析結果が得られております。

現在の日本では赤外線やX線撮影による分析が主流です。さらに肉眼で帝国大学時代の先生や博物館の学芸員の先生方が判定しています。しかし、この方法では間違いが多いことが、米国で解析されることにより分かってきております。

NOTE

- 1、清少納言は摂政関白道隆の娘、一条天皇の皇后定子に仕えていました。
- 2、紫式部は御堂関白道長の娘、一条天皇の皇后彰子に仕え、「源氏物語」を執筆しています。
- 3、道隆の弟、道長の日記「御堂関白日記」は、2013年6月30日
世界記憶遺産に登録されました。
1000年も前の個人日記は世界最古です。
- 4、清少納言と紫式部はライバル関係でもありました。

野次馬会員の隨想

松下 邦栄

私は、二神系譜研究会の立ち上げ5年目あたりからでしょうか、会員にさせて頂いております。父が「余戸二神」から栗田姓の母のところに養子に来ましたので、私の姓は二神ではありません。

「二神姓であってもおかしくないのに・・・栗田よりも二神のほうが格好いいのにな」と、小さいころから思っておりました。事務局をしておられた二神信助さん、そして今も活動をしておられる二神美知子さんとは従兄妹に当たります。ほかに、禎子さん、征造さんも含め、私ども姉妹は子どもの頃、お互いの家の庭を走り回ってよく遊んだものです。少し歳の離れている一番上の兄は、戦時中、市内の我が家を避けて、余戸の二神の家に居候をさせていただいたそうです。私の父母は、父の兄で彼らのお父さんである二神輝一郎氏に、何かにつけ相談に行っておりました。二神家は我が家では、商才はなくとも人格の優れた方たちということになっております。そういうえば、いつのものとも知れない、古いお薬師さんがあると聞いておりました。

2人のいとこの関わっている二神系譜研究会が、日本常民文化研究所とタイアップして、何かアカデミックな研究をしておられると知りました。実際に、時代を生きていた祖先のことを想像しながら、少しでも事実に迫るような資料に行きあたる面白さがあるに違いないし、二神島にも行ってみたいと思います。

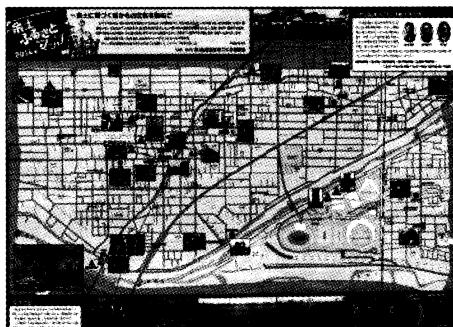
島の祭りも体験してみたいと思いつつも、今の立場上なかなか果たせません。二神という姓への憧れ、そして、何かアカデミックでいて自分の祖先につながっている情報を教えていただける（お恥ずかしいことに、申し訳ないことに全部は読み切れておりません・・）という、野次馬的興味で会員にさせて頂いております。

そんな訳で、二神系譜研究会に提供できる資料も何も持ち合わせてはいませんが、一点だけ、先日、日本常民文化研究所の萬井先生

と新横浜でお目にかかる機会をいただきました折、「ああ・・」と思うことがありました。私の母自身も、実は一歳の時に栗田家に養女に来ておりまして、「家」というものにいくらかの使命感があつたのでしょうか、家系関係の事をよく話題にする人でした。

「二神家は24ヶ村の大庄屋じやけん、私のところになんか来てもらうのは勿体ないんぞな」と言っておりました。私は、「ただ大きい」という意味で考えておりましたら、萬井先生が「20ヶ所以上を纏めているのを『大庄屋』というのです。」と教えてくださいました。母の言っていたことは、あてずっとではなかったのですね。

この二神系譜研究会の事務局の皆様の、あくなき探求心と私利私欲を超えた（良い言葉が見つかりません。）ご活動に、いつも感動しております。そして、これからも外野席ではありますが、会員として参加させていただけましたら幸いです。



余戸地図



二神家庭園にて（昭和3年）



余戸二神家

役員のつぶやき

近くて遠い故郷

関西支部 二神 喜久雄

私は大阪で生まれ育ちました。幼いころに親を亡くし、祖母から愛媛県西条市壬生川三津屋という町に自分の祖先があると教えられました。どんな事情からか親戚づきあいもなく、自分の祖先・縁故・会ったことのない方たちへの想いだけを募らせ、現在に至っています。

親からは何も聞けぬまま、祖母から伝え聞いたことも不確かで、唯一、縁が続いていた方も他界され、今となっては手がかりなしです。途絶えてしまったものの、今も必ず私の縁者がおられる「故郷」と強く思っています。

大阪から4時間ほどで訪ねることができる町ですが、大病を患い体力的に無理がある近頃です。子供らに、祖先・縁故・「故郷」のことを伝えるのは、親である私の責任だと思っています。

そんな近くて遠い故郷に、闘病生活を終えて体力がつけば、必ず訪れたいと思います。その際には、私たちのことを分かる方、また縁者がおられたら、ぜひお会いしてお話を聞かせて頂きたいと希望しています。



宏介さんのなにわことばで思うこと

中部・関西支部理事 二神宏介

はじめに

少し古い話になりますが 2013年初夏の話

愛媛県人会総会での講演会の議題に興味があり参加しました。

二宮清純さん（南予出身スポーツジャーナリスト）の講演は興味深いもので耳の底に残っている話を書いてます。

1：時期尚早：100年たっても時期尚早（やる気がない）

2：前例がない：200年たっても前例がない（アイディアもない）役人の逃げ言葉！！やる気もアイディアもなし。この言葉は役人でなくとも周辺でよく使われてます。今ではこの言葉を使ってる会議では即座に嫌味をいいますねん！！やる気が無いんとちやうかと。皆笑いますけどホンマの事やから真剣に検討しまっせ！！。

県人会総会で同席のE銀行の支店長さんと懇意になり「海の民」の話をしましたら早速県事務所に行くから冊子をほしいとの事で事務所の所長さんにお願いして「海の民ふたがみ」を渡してもらうお願いしました。支店長さんは河野姓で河野水軍に興味を持っておられ、家にも先祖伝来の太刀があると言ってはりました。家宝ですな。

愛媛大阪県人会でも二神系譜研究会をPRします。

話はコロッと変わりますが読売（大阪）系テレビ日曜PM7時からの鉄腕ダッシュ見てはりますか？

ダッシュ島は二神島属島由利島と過去に会報でも聞いています。

二神系譜研究会でも過去何度か上陸して調べているみたいです。

けどテレビ局と二神島漁協との契約で現在は一般の人は上陸



できないらしい。現代の島のすたれた状況と過去の繁栄。

先住の人 はどんな気持ちで見てはんのやろ !!

●注倉掛喜八郎著ぽん ぽん船の旅の一部を抜粋してみました。

ダッショ島でこの景色はよく出てきますが倉掛喜八郎さんの
イラストにも注目

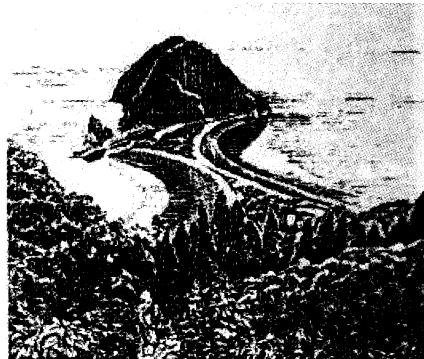
「ポンポン船の旅」

倉掛喜八郎著

一部抜粋より

この文を書かれたのは昭和 59
～ 60 年ころの話ですが今から
28 ～ 30 年前の話になります。

(二神島と由利島、小さな二つ
の親子島で生き由利島最後の島民になった夫婦の心温まる昭和
の昔話)



中村勝美さんスミエさん夫婦は出耕地を合わせて約 1 ヘクタールの畑にみかんを栽培するかたわら、夏の間だけ「たこつぼ漁」をしている。中村さんの漁船豊勝丸で、由利島へ案内してもらう。二神島から南西へ約 25 分で由利島に着いた。池を切り開いた小さな港に船を入れて島に上陸。由利島は砂洲で結ばれた東西二つの島。昔から二神島の小島であり磯も山も村方稼ぎ第一であった。かつて夏場は大勢の人が来て、イワシを獲り浜で煮干しを作った。山も肥沃で作物がよく実る。いま、出耕作の人たちが農繁期に寝泊まりするだけだ。中村さんの畑は、東の島の高さ百数十メートルの山の中腹、斜面を開墾した段々畑である。南西に面して日当たりのよい湿地に温州ミカン、伊予かん、ネーブルが黄金色に実っている。見晴らしのきく畑に腰を下ろしてみかん作りの話を聞く（途中略）勝美さんは家族

の暮らしに先行きを案じた。漁は女手ではできないと畑作りはその翌年から始まった。勝美さん39歳、スミエさんは2歳の幼児を抱えていた時である。島に倉庫兼自宅を建て、たこつぼ漁をしながら冬場の3か月間を開墾にあてた。開墾はすべて人力。人夫を雇い、スミエさんが主に開墾。スミエさんは10歳のころから子守をしながらすぐ隣の父の畑も開墾したから2度目の開墾である。開墾は夜明けから手元が見えなくなる日暮れまで、汗と土にまみれた重労働。芋、麦飯、ランプの暮らし。1町歩の畑を作るのに13年を要し、それは余儀なく幼児を親島（二神島）に預けての切なく長い歳月でもあった。艤船の時代のこととて、親島に帰りゆっくりと骨休みできたのは盆、正月と作物の収穫時や秋祭りの時だけであった。開墾から始まったみかん作りの幾年月を振り返れば、黄色いダイヤともてはやされた良き時代は短い。虫害、干ばつ、冷害など気ままな自然を相手に苦労が多い。加えて親島から海を渡っての出耕作である。ほとんど毎日「みかんが待っているから」と畑に通う。

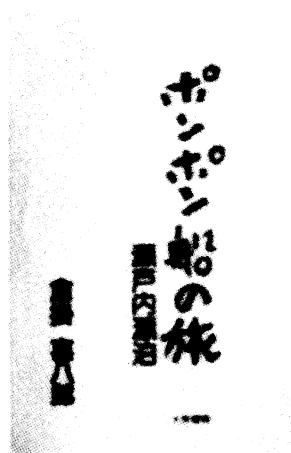
（中略）

中村さん夫婦は体がしんどい、ミカンが安いからつまらんとかいうことは一度も口にしなかった。それどころか「みかんも人間の子も同じ」と様々な性格の700本以上のみかんの木に（暑かろう、寒かろう、冷たかろう）自分の事は二の次でみかんに愛情を注ぐ。

（後略）

由利島を苦労して開墾された先人に、今TV 鉄腕ダッショは面白おかしくワーワー言っているがもの悲しさを感じまんわ。

テレビを批判するつもりは全然おまへん。ダッショ島を再開発してもらって、二神島の繁栄に期待しましょう。



参照「ポンポン船の旅」著書は二神倫一郎さんから紹介されました。

毎度しようむない話ですんまへん !!

話の締めはいつものように「大阪手打ち」です

二神系譜研究会のますますの繁栄を祈念して !!

それではよろしゅー（お手を拝借）

打ち一まひよ（う～ちまひよ）チョンチョン

もひとつせ チョンチョン

祝って（いをーて）三度 チョチョンガ チョン

今年も中部・関西支部をよろしゅーたのんます !!

有名になってきた由利島

理事 二神 康郎

二神島の属島である無人島の由利島が、二神島を差し置いて全国的にも有名になってきた。毎週日曜日のゴールデンタイム、午後7時に日本テレビ系列で「鉄腕DASH」をタイトルとするバラエティ番組が放映されているが、この中に由利島が毎週のように登場するからだ。

2012年9月からスタートしたこの企画。城島茂など5人で編成するロックバンド奏者で、男性アイドルグループのTOKIOが、無人島のDASH島に上陸。探検、開発する場面が売り物となっているが、このDASH島とは由利島であることが、鳥瞰TV画面からも明らかであり、ネット検索してもすぐわかる。

由利島は、二神島の沖合に位置し面積は0.45平方キロメートル、標高は174.1m、大小2つの島が砂州でつながっており、「沈んだ島」として、「由利千軒」の伝説もある。かつては漁業などで栄え数百人の住民がいたが、1965年ころに無人島になったと言われている。

TOKIOの5人は、無人島を自分達で開拓し「小さなニッポン」を作ろうとしている。手始めに作ったのが、入江の奥の砂州の上に建てた二階建ての舟屋だ。一階部分には舟を収納できるスペースがあり、宿泊もできそうな立派な建物だ。彼らが発見した古井戸からは450m離れているが、その間にローマ時代のような高層水路を作つて水を送る計画もある。

彼らは探検して多くのものを発見した。民家跡、神社、トロッコとレール、石垣、窯と鍋、湧き水、洞窟、青大将、ウサギ、ヤモリ等々、興味をそそるものが多い。無人島での探検ぶりを放映すれば、誰しも興味を持ち、ある程度の視聴率も取れるだろう。

由利島のオーナーは二神島の住人であろうと思われるが、日本テレビから利用料も入り、由利島も投資され、手入れされて名所となれば観光客も増え、その親島の二神島にも観光客も増え、その二神

島にもメリットがあるにちがいない。しかし、開拓や発見にも限度があり、ニュースバリューも無くなつて、いずれも放映は終わるだろう。そうなると舞台となつた無人島に建設された諸施設は、撤去されたり風化したりして、すべては自然に還るだろう。コマーシャリズムに乗つて咲いたあだ花は、線香花火のように消滅するに違ひない。今回の番組で自然破壊が進まぬように願いたいものだ。

三津浜信用金庫の理事長であった実父の葬儀は、古三津の儀光寺で執り行われたが、伝説によれば、儀光寺は由利島と深い関係がある。小生は、由利島に2回は行つた。最初は「二神島探訪」と題した小生の原稿が、朝日新聞社発行「朝日旅の百科」に掲載された。今から、30年ほど前のこと、豊田渉常任理事の父君に小さな漁船に乗せてもらって訪問した。

2回目は、今から20年ほど前に豊田渉常任理事本人に連れて行ってもらった記憶がある。そのときは、遭難したときなどに上陸してきた船乗りの為に設けられた「公衆電話」が設置されていたのが印象的だった。この電話は、その後まもなく撤去されたと聞いた。



大由利から小由利を見る

富さんの桜～昔、昔の昔ばなし～

二神 亮郎

春のこの時期になると想い出すのが、数年前に取り壊した小才角の実家（高知県）にあった桜の大木のことである、

祖父初太郎が育った実家は、「入船屋敷」と呼ばれ、600坪の屋敷に100坪の家屋があった。裏山には8反ほどの段々畑があり、最上段にはソメイヨシノの大木が、春になるとどこからでも見える大きな桜が見事に咲いていた。

祖父初太郎は、文久2年（1862）生まれ。若いころ、佐川村の酒屋（？）の息子がよく遊びに来ていたらしい。名は「富さん」と呼ばれ、「初さん」とは同じ年で気が合つたらしく、長いときは1か月も滞在したようである。

「富さん」は変わり者で、植物の採取と写生に明け暮れていたとの事でした。ある時から「富さん」は家庭の事情で音信不通になつたが、「初さん」が42歳の厄年の時に突然、富さんから「桜の苗木」が送られてきたそうです。

「佐川村の古い朋輩の富さんから送ってもらった桜の苗木、富さんの桜だ。高知の五台山にも同じような桜があるそうだ。」とよく言っていたそうです。

父・栄から聞いた話ですが、栄も初太郎から話は聞いていたが、生まれる何年も昔のこと、話だけでの受け伝えで知る由もありません。何の資料らしきものはありません。

数年前、偶然ですが、「今年が、富さんこと牧野富太郎の生誕百五十年である」という特集記事の中で、桜の好きだった牧野博士がソメイヨシノの苗木を数本、高知の友人と関係者に送ったという記述がありました。



もしかしたら、その内の1本が「初さん」の言っていた通り、あの大木の桜だったのかもしれない。まず間違いないだろう。

今は荒れ果てた雑木林になっていると思うが、桜は咲いたのだろうか。私はもう何十年も眼にしていない。朽ち果てたのであろうか。

牧野富太郎博士は、小学校中退。独学で東京大学講師にまで上り詰め、「植物学の父」と呼ばれ、同時に「植物の詩人」として、他に類のない研究と成果を残した科学者であり、博士の植物園は高知県立牧野植物園に保存されていますが、いかなる有名画家の絵よりもすばらしく、見る人を感動させるそうです。世界的にもこれほど多くの発見と標本蒐集などの実績を残した学者は大変珍しいと言われています。

百五十年前といえば、どんな世の中だったのだろう。アメリカはリンカーン大統領の時代。南北戦争を経てまもなく奴隸解放宣言。プロイセン（ドイツ）では、かの有名なビスマルクが政権を担当していた。日本では、第14代徳川家茂の時代。薩摩・長州・土佐などによる尊王攘夷派が京都を制圧し、武市半平太・桂小五郎・高杉晋作らが謳歌し、坂本竜馬が脱藩して勝海舟の門下生になっています。

一方、幕府も外国奉行を全権として、福沢諭吉ら数十人がヨーロッパ各都市を見学して回り、あらゆる分野にわたっての見聞録を「西洋事情」として世に出しています。こんな背景を持った時代に、「富さん」「初さん」は生まれています。

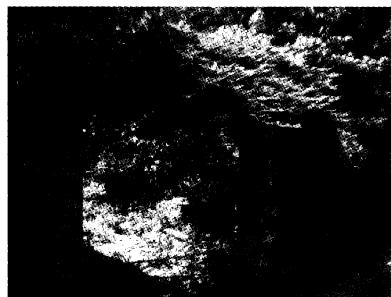
小才角の人々は、「草を見る、花を見る変人」、変わり者の富さんとして扱ったようです。でも「初さん」は、友人が偉くなったと常に自慢をしていたそうです。

同じ高知で育った寺田寅彦博士が、「科学者になるには、自然を恋人としなければならない。自然は、やはりその恋人のみに真心を打ち明けるものである。」と随筆のなかで、先輩を称えて書いています。91歳のとき、東京都の名誉都民になりましたが、94歳で逝去されました。たしか、没後に文化勲章を受章しました。

佐川町に関係ある人に、小才角の「初さん」との関係が何か資料として残っていないか問い合わせをしてみたのですが、「小才角」という地名は出てくるようですが、そこを根域に「幡多（郡）一面を探索」した様子は残っているそうです。

「富さん」の最初に出した「植物図鑑」などもあったそうですが、誰も気が付かないうちに無くなってしまいました。風呂の焚きつけになったのでしょうか。

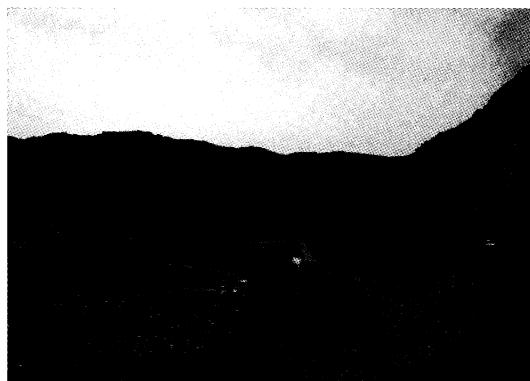
「初さん」は、昭和9年、72歳で亡くなっていますので、「富さん」の晩年のよき時代のことは知らないわけですが、お互い良い時代に良い夢を見たのでしょうか。



小才角旧二神亮郎屋敷跡の門



桜の大木が見られた裏山



懐かしさが甦る小才角の海

人はなぜ移動するのか

理事 二神 久藏

私の祖父・一治（いつじ）は、安政6年5月生まれ。伊予の土佐寄りの片田舎「城辺村」出身で、浪速の緒方塾（適塾）を出て、郡の医師会長まで務めた。これは本人の向学心のため、浪速へと片田舎から都会へと上るのだが、当時はまだ人が移動するには藩の許可証が必要で、今のように自由な行き来が出来なかつたはずだ。明治維新後、人々の移動は自由になり上洛を目指して、京・大阪・東京へと人は移動するのは自然の流れだった。当時は、藩を離ることは大変だったと思われる。祖父は、宇和島藩。



以前に、日本常民文化研究所の萬井良大特別研究員にお会いし、立ち話しあつたが、鎌倉末期、現在の栃木県宇都宮市と片田舎の城辺町との交流関係を聞かされて、「ほんとかいな」と思っていました。奈良に帰り、立ち話して出でていた「二神新左衛門」のことが気になり、城辺の墓の写真を引っ張り出して確認してみた。確かに「二神新左衛門」の銘があり、当人の墓石写真を萬井研究員に送り解説して頂くと、どうも現実味を帯びてきました。

現在の移動は簡単ですが、中世の鎌倉末期はどこも交通手段が未発達で費用・日時等がかかり、四国は地理的にも不便だったはず。江戸、京都、大坂を通り越して四国の片田舎に何があったのか。城辺村周辺は海が近いので、珊瑚・干物・米・陶器（1800年前後、寛政の頃、古伊万里と見間違えるものが、当時、このあたりで焼かれていた。現在は窯跡が多数残るだけだが、昭和36年に二神彰次郎が専門書「陶説」に「御荘焼」として発表し定着した。）金銀銅、

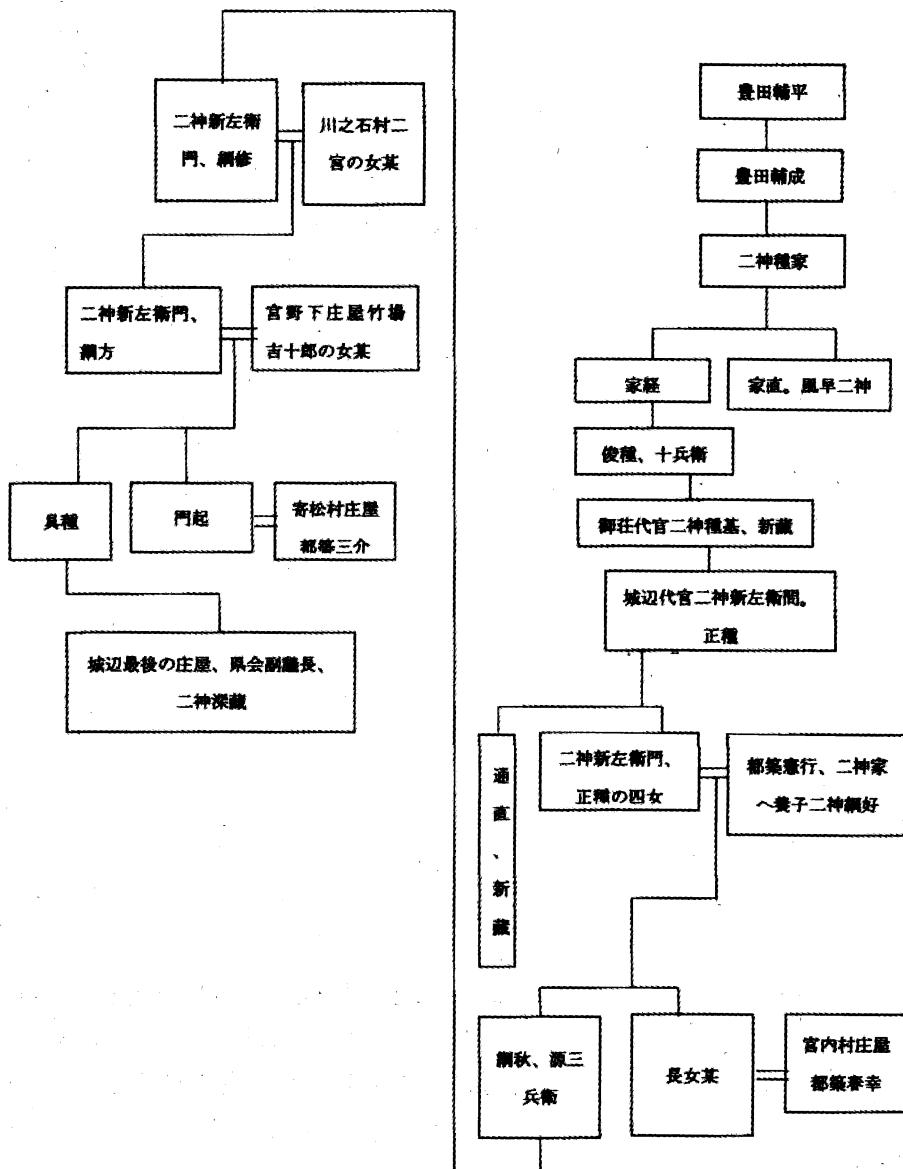
砂鉄はもちろん無い。

萬井研究員によると、鎌倉時代は東国による西国占領の時代で、東国の武将が西国に来ることは珍しくない。元寇の後は、東から西へ移動した武将は、毛利・小早川・吉川・大友氏等多くあったとのことです。元寇を警戒して海岸線を固め、また、南方交易が盛んになり、伊予灘航路が活発になり、その利権を求めて内陸から海岸部へと移し、天正の頃より海に強い河野家との結びつきを深めて、海の利権を確保したのではないかとの、お考えです。

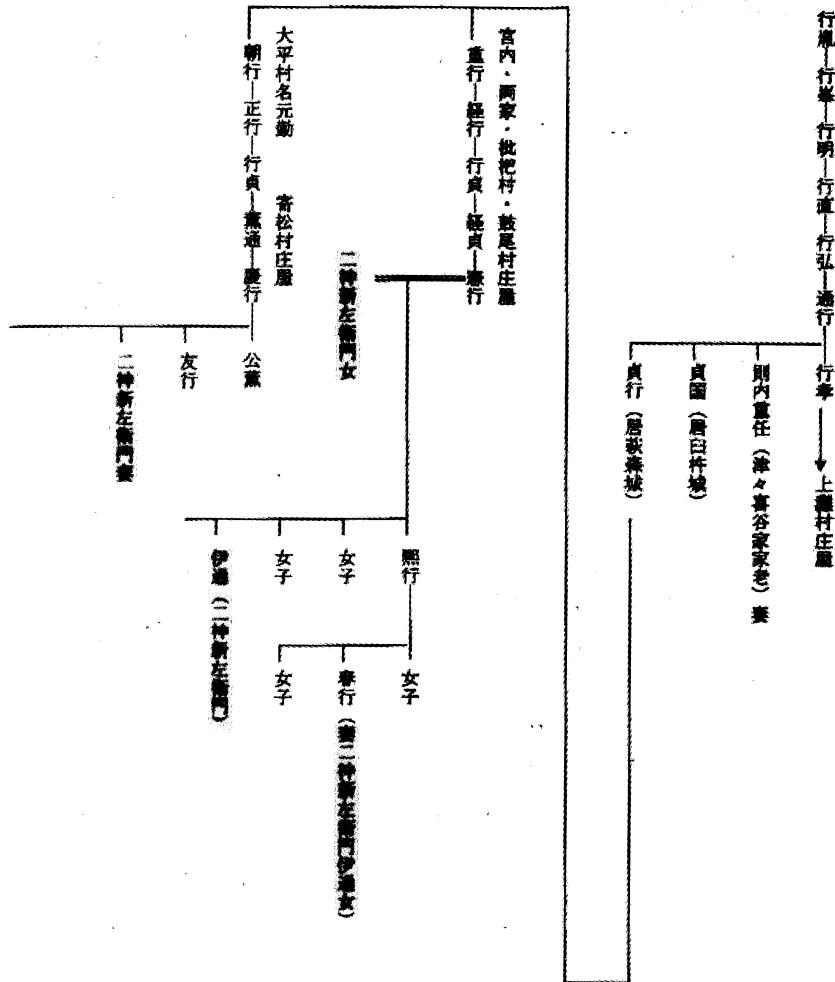
戦国期における伊予国の大名の一つに、下野国芳賀郡続谷郷（現在の栃木県芳賀郡市貝町続谷）を名字とする武将に「津々喜谷氏」がいた。津々喜谷氏は、喜多郡（現在の大洲市と内子町の一部）の地頭職だった下野国の宇都宮氏傘下の領主で、同氏とともに伊予国に土着したと考えられる。その後、宇都宮氏の没落とともに、その配下にあった領主たちを傘下におさめていき、戦国末期には大名として成長する。津々喜谷氏6代目通行の時、河野氏から和歌・偏諱を賜った記実もある。しかし、天正の頃には大名としての姿を消して、近世は大洲藩領（現在の伊予市双海町上灘）の庄屋として幕末まで続いている。

その津々喜谷氏の系図に「続谷系図」がある。その系図によると、城辺二神と関係が深いのが保内組代官であり、宮内・両家・枇杷島・鼓尾四ヶ村（旧保内町）の庄屋であった津々喜谷氏。この津々喜谷氏（通行の子、貞行）は、宇都宮氏の分家である萩森氏に養子として入ったのではないかと考えられている。それは津々喜谷氏が宇都宮氏を凌駕していく中での勢力拡大政策の一環だったと考えられます。そして、本家津々喜谷氏は小早川氏の転封と共に筑前・筑後へ行くが、萩森の津々喜谷氏は付いて行かず現地に帰農したと思われる。この萩森の津々喜谷氏と城辺二神氏とが妻女、養子の遣り取りを盛んにしている。江戸中期には、津々喜谷から都築へと名字を改めているが、都築と名字を改めてからも最近まで縁戚が続いている。

城辺二神略系図



続谷略系図



以上が概要ですが、私は古文書が読めません。萬井研究員をはじめ、専門家のご指導を待ち望みます。「続谷系図」とその解説は、神奈川大学評論 63 号の日本常民文化研究所萬井良大研究員の執筆文をほとんど参照にさせていただき感謝いたします。

39会

二神 俊一

松山東39会を略して「39会」と呼んでいる。昭和36年から39年の間に、松山東高等学校に在籍した同期の会のことである。昭和39年3月に卒業して、今年は50周年を迎えたことになる。

先日、卒業50周年を記念して同期会を開催したので、概要を報告したい。

(準備裏話)

約1年前から世話を人が集まり、①時期、②場所、③懇親会中身の検討を行った。

- ① 時期については、例年5月末に同窓会の総会があるので、それに引っかけたら両方に参加可能ということで、平成26年5月22日に決定した。その日は、明教ゴルフ大会もあるので、39会は夕方からの開催とした。
- ② 場所については、道後の大和屋本店が「同窓会パック」をPRしていることもあり、値段も手頃なので大和屋本店に決定した。
- ③ 宴会の中身については、同窓会パック料金なので、お任せとした。
- ④ 同期会の案内は、世話を人に代わって大和屋本店から案内状・はがきの回収管理などやってくれる。(メールアドレス登録者へは、重複するけれどもメールでも案内した。)
- ⑤ 50周年の同期会だから、何か記念になるような企画はないかといろいろ無い知恵を絞ったが、そう簡単に妙案は浮かんでこない。そんなとき若いころにJAZZ演奏をやっていた連中から、BGMとして生演奏をしてみたいと提案してくれた。しかし、還暦を過ぎてから体調を崩した者もいて、練習量が足りるかどうか?心配していたが、彼ら4~5名が毎週火曜日午後に集まって練習し、事前にお披露目もしてくれて、これならできるということになり、

当団は、最高の生演奏を披露してくれた。彼らの名前は「ザ・リハビリーズ」。

- ⑥ 同期は、昭和20年生まれが大半で、数えで「古希」を迎えるので、50周年記念に、道後伊佐爾波神社を参拝して古稀のご祈祷をしてもらつたらいいかな、と声掛けしようとしたら、「もう、いまさら、神社のご祈祷を受けても、御利益がない」とか、消極的な意見が多く、神社参拝は見送りとした。
- ⑦ さて、困ったなと思っていたら、「松山子規記念博物館」の竹田館長から、館内の学芸員が常設展示を案内してくれるコースがあるとのこと。早速、メール・はがきで案内したところ、30数名の0学者が参加してくれた。団体割引で入館料は一人160円だった。同級生の竹田美喜館長に感謝です。

(本 番)

- ① 夕方5時45分頃に、ほぼ出席者全員が揃い、記念集合写真撮影、予めイノウエ写真館へ撮影を依頼していたので、103名を半分ずつ、2回に分けて撮影。恩師2名は両方へ座ってもらった。
- ② 定刻6時から司会者の合図で開宴。最初に、最近の物故者に対して全員の黙とうをし、主催者を代表して幹事が挨拶をしてから恩師の岡田先生(84歳)に祝辞を述べていただき、生演奏をバツグンに校歌斎唱を行った。その後、恩師の紅谷先生の乾杯の音頭で宴会が始まった。
- ③ 今回、初参加の人もいて、懐かしい面々がお互いに旧交を温めながら、良い雰囲気であった。
- ④ 「ザ・リハビリーズ」の演奏も素晴らしい、50周年記念としては豪華版のアトラクションであった。
- ⑤ 宴会途中で、関東支部、関西支部の幹事からも挨拶をしてもらった。
- ⑥ 中締めは、いつもの元応援団長2名が締め、それから全員が輪になって、「四季の歌」、「高校三年生」を歌い、フィナーレを迎えた。

⑦ たっぷり 3 時間はあったが、あつという間にお開きの時間となつた感じであった。後は、三々五々、二次会へ向かって盛り上がつたようである。

以 上

(2014. 6. 8)



リハビリーズ生演奏



編集後記

この度、大変遅くなりましたが、第16号を皆様のお手許にお届けすることができました。ご寄稿頂いた方、編集に携わって頂いたメンバーのご支援・ご協力に対しまして厚くお礼申し上げます。

今年度の活動方針につきましては、平成26年5月11日開催の総会にて確定したところですが、具体的な活動・運営につきまして、少数のメンバーで対応しなければなりません。

少子・高齢化の波に負けないように、会員の増強と理事役員のレベルアップをはかり、少数精銳とまではいきませんが、会員が一丸となって二神系譜研究会の地道な活動を支えていかなければなりません。皆様のご協力を願いいたします。

来春は、二神系譜研究会が2000年に発足以来15年目を迎えます。2015年4月開催予定の、豊田町（山口県下関市）一ノ瀬での「豊田氏慰靈五年祭」への参加に向けて、総会の同時開催なども、これから準備・検討に入ります。詳細が決まり次第ご連絡させていただきます。

引き続き、二神系譜研究会の発展のために、皆様のご意見などを寄せいただきたくお願い申し上げます。

二神 俊一



常任理事会（2014.6.23）

編集後記

私事ながら平成26年3月末で定年退職となった。振り返れば、昭和47年7月中島町役場に奉職。松山市と合併し通算41年9ヶ月勤めさせていただいた。中島町役場に入った頃は、「役場は給料が安いのに、どうして民間にいかんの？役場の倍はもらえるぞ。人に使われるより自分で農漁業をしたほうがええぞ。」とよく言われた。そんなに公務員はいかんのかと思っていた。やがて、社会が変化していくと今度は、「公務員はええなあ。きちんと給料もらえて」に変わった。人とは勝手なものだとつくづく思い知らされた。確かに公務員は良かったと思う。それは、住民の為にきちんと仕事をさせていただくというのが前提であり、いい加減なことはできないし、してはいけない。私は、おかげ様というか、この40有余年大きな病気もけがもなく勤められたことは、自分でも凄いと思う。そして、再任用ということで、4月から中島のB&G海洋センターに勤めることになり、再び船通勤が始まった。

さて、「海の民ふたがみ」も第16号となった。いろいろとやりたいこと、調べたいことはいっぱいあるのに、今までのようになじみ身体や頭が動かない。でも、できるときにできる人ができることをやらないと何も始まらない。その一人としてこれからも地道に調査研究のお役にたてればいいなと思う。

二神系譜研究会も発足当時からみると、会員数の減少や高齢化が著しいのは否めない。でも、民俗学者宮本常一のいう「記録しなければ記憶されない」を念頭におきながらやっていきたい。30年後に日本人の人口は8,000万人台になり、65歳以上が3分の1になるとか。そのときに二神系譜研究会はどうなっているのだろうとの心配もあるが、着々と進めて行くことが大事。やらないよりはやることが大切だろう。目標を持ってこれからも。そう、心がけていきたい。

今号も皆さんからの貴重な原稿をいただきました。原稿量が多い少ない、内容の善し悪しではなく、みんなで一つのことに向かって進んで関わっていくという作業が、これから社会では重要になっていくのだと感じています。本当にありがとうございました。原稿を書き終わった時から、次の準備をお願いします。

豊田 渉